

## 第5章 額田部狐塚古墳における埴輪の生産体制

### 1 古墳の概要

額田部狐塚古墳は、奈良県大和郡山市額田部に所在する墳丘長 50 m の前方後円墳である。当古墳は、額田部丘陵の西端に位置し、大和川と佐保川の合流部の北約 700 m の地点に築かれている。額田部丘陵とその周辺に展開する古墳の数はそれほど多くないが、中期初頭には直径 50 m の円墳である松山古墳が築造されている。その後、中期を通じて古墳築造は低調となるが、後期には、額田部狐塚古墳のほかに墳丘長約 40 m の推古神社古墳、船墓古墳などの前方後円墳が展開するようになり、断片的ながら埴輪片の出土が知られている。その他、直径 20 m 程度の堀ノ内古墳および南方古墳なども後期の古墳とみられ、中でも南方古墳では大刀形埴輪とともに小破片ではあるが額田部狐塚古墳と類似する様相を示す須恵器系とみられる円筒埴輪片が出土しており注目される（服部編 1991）。

額田部狐塚古墳は、墳丘主軸が北東から南西を向き、後円部を北東、前方部を南西に向ける。墳丘の周囲には周濠と外堤がめぐっており、外堤の外側には外周溝の可能性が想定される溝が確認された（服部編 1984）。後円部では埋葬施設が発掘調査され、同一墓壙内の 2 基の木棺が検出されるとともに、銅鏡、玉類、刀剣、冠とみられる金銅片、馬具、挂甲等多様な副葬品が出土した（泉森 1966）。

墳丘テラス面の東側くびれ部から前方部にかけて埴輪列が確認され、同様に西側くびれ部から前方部にかけても列そのものは検出されなかったが埴輪がまとまって出土しており埴輪列の存在が想定される。また、後円部墳頂からは盾形などの形象埴輪片が出土した。埴輪の様相や副葬品の特徴から額田部狐塚古墳は後期前半に築造されたものと想定されている。ただし、埴輪の詳細は断片的にしか明らかになっておらず（服部編 1984、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015）、資料化によってその様相を明らかにする必要があった。

### 2 埴輪の特徴

今回は、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に保管されている資料のうち、2015 年の特別展「継体大王とヤマト」にて展示された資料（図 22・23）を元に図化をおこなった。埴輪には、円筒埴輪と蓋形埴輪がある。以下に資料の詳細を報告する。

**円筒埴輪**（図 19・20） 口縁部、体部、底部の各破片を確認したが、現状では一個体で全形の判明する資料はなく、突帯数などの構成を知る手掛かりは少ない。口縁部高は約 12 ～ 14cm、突帯間隔は約 9 ～ 13cm、底部高は 12 ～ 17cm となる。口縁部径は 1 点のみの計測であり約 28cm、底部径は約 26 ～ 30cm である。

透孔は円形のみが認められるが、現状では何段目に配置されたかをうかがい知る資料はな

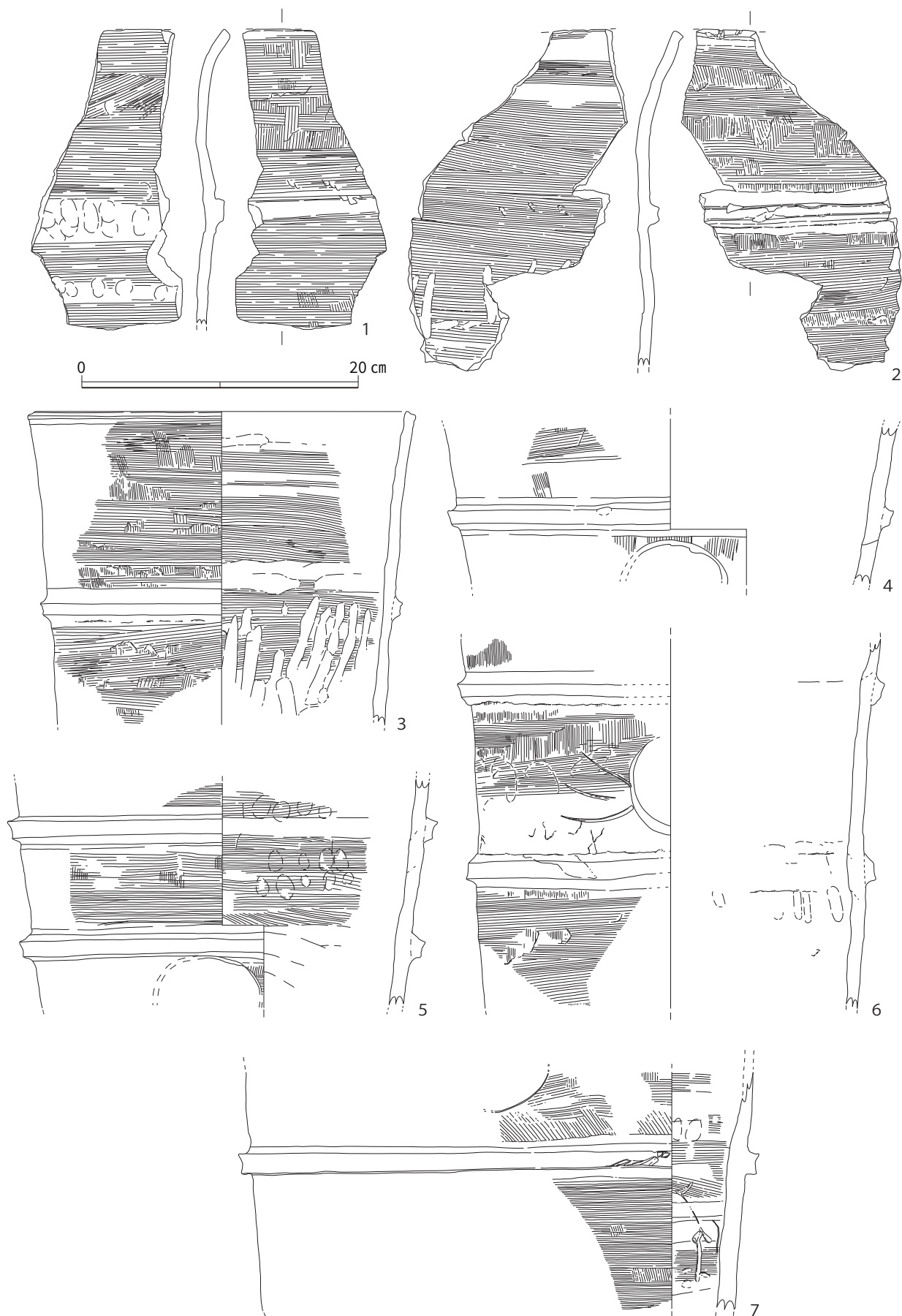


図 19 額田部狐塚古墳出土埴輪 1

い。ただし、5は2条の突帯がめぐり、下側の突帯の下部に円形の透孔が位置することから、この破片の下に少なくとももう1条の突帯がめぐっていた可能性が高い。そのため、5は3条突帯4段構成以上となるものと考えられ、3条突帯4段構成であった場合には透孔は下から2段目に配置されていたことになる。また、1段の中での配置についても現状では明確となる資料はないが、基本的には2孔と考えられる。

外面調整は、いずれの資料にも突帯の貼り付け前にタテハケ、突帯の貼り付け後に回転ヨコハケが施されている。回転ヨコハケは器壁に沿って密に施されるものが多いものの、9などのように疎らに施されているものも少数認められる。工具幅は約3cmほどの比較的狭いものが用いられており、回転力は強く器壁を何周にもめぐって施されている。なお、9は底部の外面下端に、幅約1.5cmの回転ケズリが認められる。

内面調整も外面調整と同様に回転ヨコハケを基調としており、基本的にはタテハケは認められない。回転ヨコハケを消すように突帯貼り付け部の内側付近には横方向のナデが施されているものが多く、内面の回転ヨコハケは突帯貼り付け前に施されたものであることがわかる。回転ヨコハケが認められず、代わりに回転力の強いナデを施すものが少数ではあるが6・9などのようにある。

焼成にともなって器壁に黒斑が付くものは認められず、いずれも焼成および胎土は堅緻である。基本的には土師質で赤褐色の色調を呈するものが大半であるが、1・2などはやや灰褐色に近く硬質な様相を呈する。ただし、後述する蓋形埴輪で確認されたように明らかに青灰色の須恵質を呈するものはない。また、外面に赤色顔料を塗布したとみられる赤色を呈する個体も認められる。

口縁部は1・2のように緩やかに外反するものと、3のようにやや外傾しながら直立するものの2種類がある。口縁端部は直立することを基本とする。突帯は比較的突出度が高く、上稜ないしは下稜が強く引き出される資料も認められる。6は2条の突帯が残存しているが、上側の突帯は上稜が突出するのに対し、下側の突帯は下稜が突出する。また、断面より観察できた粘土接合痕は、破片の上下で逆転しており、残存部の上半が内傾接合となるのに対し下半は外傾接合となる。突帯と粘土接合痕の特徴から、二分割倒立技法によって製作された資料であることがわかる。7は突帯上のタテハケの方向が突帯直上では斜めになるのに対し、突帯上約5cmでは垂直となり、上下で方向が明瞭に異なっている。粘土接合痕の向きは明瞭でないものの、ハケメの方向が大きく異なることから7も二分割倒立技法によって製作された可能性が考えられる。その他、11<sup>(1)</sup>あるいは12は図の下端側が口縁部と同様の形状を呈するが、器壁全体の傾きなどから底部の破片と判断し、二分割倒立技法によって製作されたものと判断した。

一方、8～10・13などは円筒埴輪通有の底部の形状を呈し、また粘土接合痕も内傾する。このことから、二分割倒立技法をもちいず底部から口縁部までを正立で製作した個体もあることがわかる。これらは底部から最下段の突帯までの高さが約14～17cmであり、畿内に展開する尾張系埴輪のうち2条突帯3段構成のものと類似することから、2条突帯3段構成の可能性があると考える。なお、後述する7に示したようにヒモズレ痕があることから、尾張型埴輪

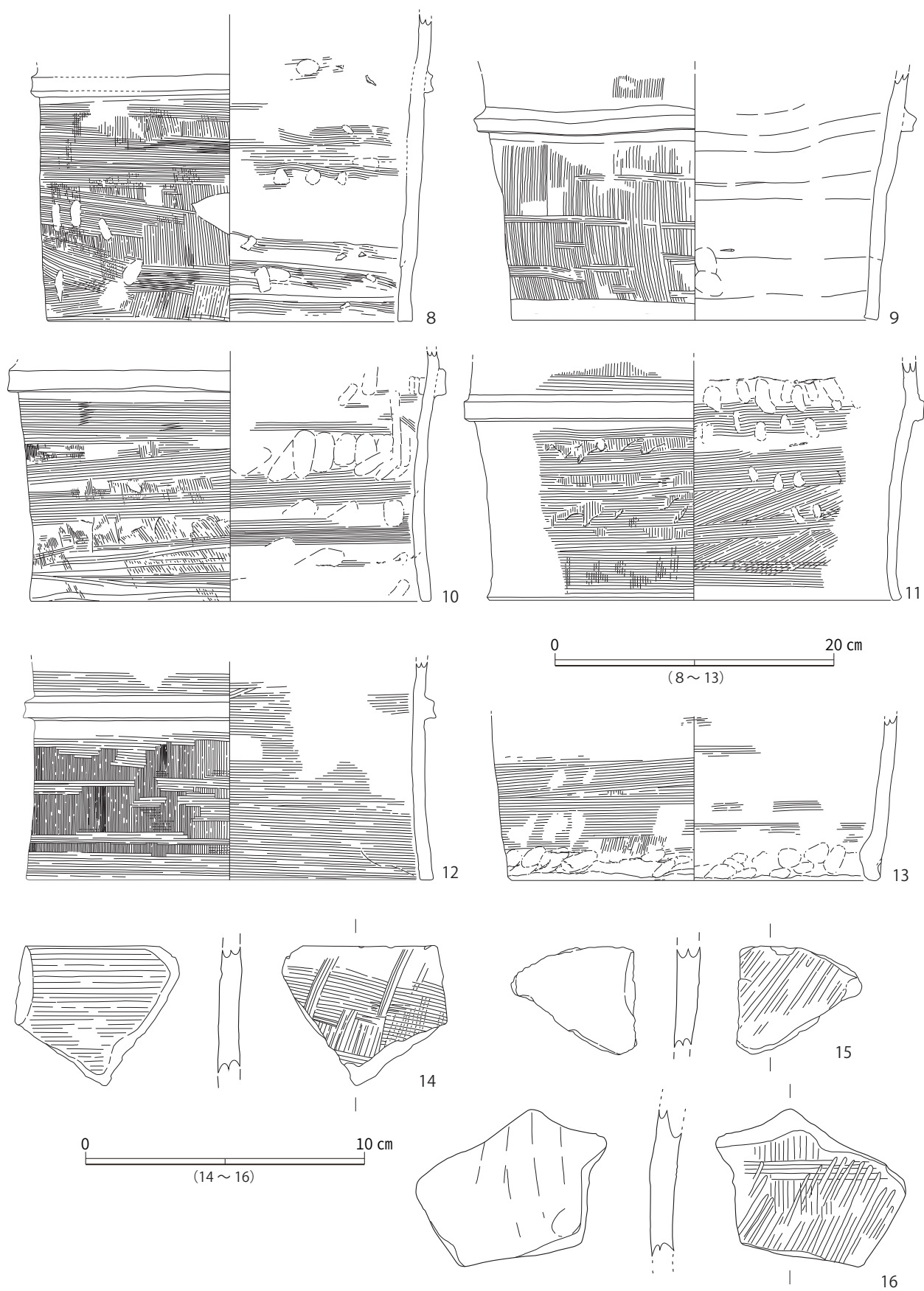


図 20 額田部狐塚古墳出土埴輪 2



の製作技術の一つである底部底面のヘラキリの痕跡の有無を検討したが、現状ではそうした痕跡を示す資料は認められなかった。

7の突帯には、下稜から上稜にかけて右斜めに突帯上を横断するヒモ状の痕跡が認められる。尾張型埴輪の2条突帯3段構成の小型品には、ヒモ状の工具を使用して製作時の回転台から円筒埴輪を離脱する技術が採用されており、その痕跡はヒモズレ・ユビズレ痕と呼称される。7の突帯上にみられたヒモ状の痕跡もこのヒモズレ痕である可能性が高い。2条突帯3段構成の場合、ヒモズレ・ユビズレ痕は最下段の中で収まるのが通例である。しかし、7ではヒモズレ痕が2段にまたがっていることから、ヒモを主に突帯の下段にかけるとともにヒモを持つ手を突帯の上段に添えて円筒埴輪を持ち上げたとみられる。

14～16の外面には、タタキの痕跡が認められる。いずれも斜めに傾くことが特徴である。特に16では回転ヨコハケの痕跡を消すようにタタキの痕跡が認められることから、回転ヨコハケを施したのちにタタキが施されたことが分かる。内面はユビナデあるいは、横方向のハケメが施されており、当て具痕は確認できなかった。

6の2条の突帯の間には円形の透孔があり、その向かって左側には3条の線刻が「シ」字状に施されている。この他に線刻を有する個体は現状では確認されていない。

**蓋形埴輪**（図21） 立飾部、軸受部、笠部の破片がそれぞれ確認されているが、現状では部位を越えて接合し、全形の判明する資料はない。立飾部には、上辺に2つの鰭状の突出をもつことが20から読み取れる。20では、下辺にも抉り状の切れ込みによって鰭状の装飾が表現されている。17～19・21にもそれぞれ上辺の鰭状の突出とみられる屈曲部が観察でき、基本的には20と類似する形態であったと想定される。いずれの個体も線刻の施されない無紋の立飾部であることが特徴である。なお、17・20は青灰色の須恵質に焼成されておりハケメが密に残存しているのに対し、18・19・21は赤褐色の土師質に焼成されておりハケメは摩耗によって一部が残存するのみである。

22は軸受部の破片であり、口縁部が残存する。口縁部は直立し、わずかに内面側に突出する稜を有するという特徴がある。外面調整および内面調整には回転ヨコハケが施されている。

23～29は笠部の破片である。笠部径は約46～53cmと幅をもつが、破片からの復元径である点に注意が必要である。23は台部の上端と笠部の接合の様相が観察でき、台部から笠部上半を一連で製作したのちに笠部下半を貼り付けたことが観察できる。笠部下半の破片である24～29が、笠部上半と台部上端からの接合部分で剥離した様相を呈することがこれを裏付ける。いずれも笠部と台部の接合部付近の笠部上面に突帯を有するが、畿内で通有に認められる高さの低く幅のやや広い帯状の突帯ではなく、円筒埴輪の突帯形状と酷似する。また、笠端部にもナデが強く施されており、28などのように円筒埴輪の口縁部形状と類似するものも認められる。

笠部外面には、基本的には横方向のハケメが施されている。器壁を数周にめぐるような回転ヨコハケではないものの、10～15cmほどの比較的ストロークの長いヨコハケが交差するように施されている。器壁に強く施されたそのハケメの特徴は、円筒埴輪などの回転ヨコハケと類

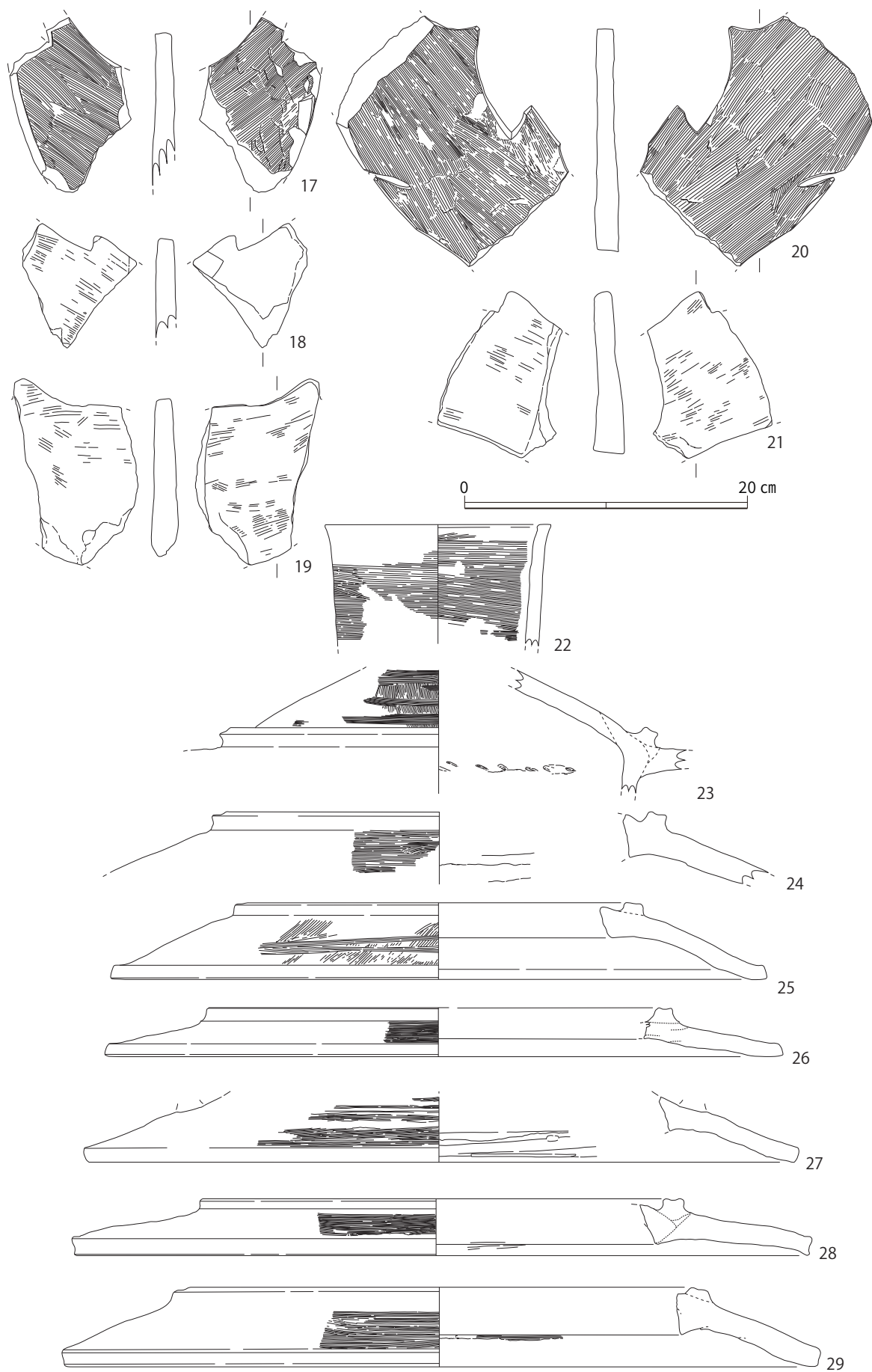


図 21 額田部狐塚古墳出土埴輪 3



図 22 額田部狐塚古墳出土埴輪 4

似するものであり、いわゆる回転ヨコハケではないものの、回転力をともなうヨコハケといえる。

蓋形埴輪も円筒埴輪と同様に器壁に黒斑が認められる資料はない。立飾部には青灰色の須恵質に焼成された破片が確認できたが、軸受部から笠部にかけての破片は赤褐色の土師質に焼成されたものであり、外面に赤色顔料を塗布したとみられる赤色を呈する個体も認められた。

### 3 額田部狐塚古墳の埴輪の系譜と周辺の埴輪

額田部狐塚古墳から出土した埴輪のうち、今回は円筒埴輪と蓋形埴輪を資料化した。円筒埴





図 23 額田部狐塚古墳出土埴輪 5

輪はいずれも外面調整に回転ヨコハケを施し、底部外面下端の回転ケズリ、ヒモズレ痕、二分割倒立技法、タタキなどは尾張型埴輪の技術的特徴を示すものである。円筒埴輪の全体形状は不明なものの、2条突帯3段構成の小型品と二分割倒立技法をもちいた3条突帯4段構成以上となる大型品とみられる二者があると想定される。

特に、7で確認できたヒモズレ痕が突帯を越えて複数の段に及ぶ点は特徴的で、畿内への尾張系埴輪の流入初期の事例である五ヶ庄二子塚古墳の円筒埴輪と類似する特徴といえる。尾張では2条突帯3段構成の小型品にもちいられた技術が畿内での技術的変容によって大型品に採用されたと考えられ、技術的変容の類似性から額田部狐塚古墳と五ヶ庄二子塚古墳の尾張系埴輪の製作者集団は同一であった可能性が高い。古墳の築造時期を元に考えるならば、古墳時代中期末の五ヶ庄二子塚古墳から後期前半の額田部狐塚古墳へという製作者集団の推移を想定することができる。



なお、13の底部外面および内面に認められたユビオサエの顕著な痕跡は、類似する資料が下原窯にあり、尾張型とは異なる他地域からの製作者の参画も想定されるところであり（浅田2023）、その技術的系譜の検討は今後の課題といえる。蓋形埴輪も、笠部の突帯の形状や受け部にみられる回転ヨコハケなどは尾張の資料と共通性が高い須恵器系埴輪の範疇で捉えられるが、現状では立飾部の形状などは全体の様相が不明とはいえ明確に類似する資料も見いだせないのが実情である。

額田部狐塚古墳との製作者集団の類似性を指摘した五ヶ庄二子塚古墳では、出土した円筒埴輪の多くが尾張系埴輪である一方、円筒埴輪の一部と形象埴輪は畿内型埴輪であった。一方、額田部狐塚古墳は円筒埴輪とともに蓋形埴輪も尾張系埴輪であるとみられる。後期中頃の堀切7号墳でも人物埴輪や馬形埴輪に須恵器系埴輪の技術的特徴が認められ、後期前半から中頃になると形象埴輪の生産にも尾張系埴輪の製作者が加わるようになったと位置付けることができる。古墳の規模や埴輪の生産量を総体的に検討する必要があるが、時間の経過とともに尾張系埴輪の製作者が独自に埴輪を生産・供給する体制が整ったと考えられることと整合的である（内藤・東影2021）。

ところで、額田部狐塚古墳の南西約200mには、額田部狐塚古墳と類似する尾張系と想定される円筒埴輪片が出土した南方古墳がある。発掘調査によって出土した埴輪のうち、主体をなすのは畿内型の円筒埴輪であり、大刀形埴輪や石見型埴輪<sup>(2)</sup>といった形象埴輪も畿内型と位置付けられるものである。尾張系埴輪はごく少数のみが採用されたと考えられ、尾張系埴輪のみが認められた額田部狐塚古墳の様相とは異なる。複数の古墳から尾張系埴輪が出土していることから、当地域において尾張系埴輪の製作者が複数回の埴輪生産に携わった可能性も考えられる。ただし、その主たる供給先は額田部狐塚古墳であり、その製品の一部が南方古墳へ供給されたか、あるいは額田部狐塚古墳の埴輪生産に関わった一部の製作者が南方古墳の埴輪生産にも携わったとみるのが妥当であろう。

額田部狐塚古墳の西約120mに所在する堀ノ内古墳、北東約400mに所在する船墓古墳でもともに後期前半とみられる畿内型の円筒埴輪片が採集されているが、現状では尾張系埴輪の存在は確認されていない。採集品のみであるため、今後の発掘調査によって尾張系埴輪が出土する可能性は残されているものの、その場合は畿内型埴輪と尾張系埴輪が一古墳で共存することとなり、尾張系埴輪のみで占められる額田部狐塚古墳の様相とは大きく異なる。尾張系埴輪の畿内への展開とともに、額田部狐塚古墳の副葬品である振り環頭大刀や広帯二山式冠も後期前半の政治的動向と密接に関わる遺物であることが指摘されている（高松2007）。額田部狐塚古墳が地域首長墓と想定される前方後円墳であること、その前代には系譜をたどることのできる地域首長墓の存在が無いことなどから、後期前半の政治的変動の中にあり、尾張系埴輪が採用されたとみることが十分可能である。

今回は額田部狐塚古墳のごく一部の埴輪を資料化するにとどまったが、今後さらに全体像を明らかにしたうえで、あらためて尾張系埴輪の系譜、また額田部地域を含めた大和の埴輪生産について論じることとしたい。

## 註

- (1) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の図録に掲載された写真では口縁部の破片として配置されていたが(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015)、今回の資料化にあたり底部の可能性が高いと判断した。
- (2) 報告書では盾形埴輪とされた小片であるが、形状や表面に施された直弧文などから石見型埴輪であると判断した。

## 参考文献

- 浅田博造 2023「尾張型埴輪の流通と展開」『季刊考古学』第 163 号、雄山閣
- 泉森 皎 1966「額田部狐塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第 17 輯、奈良県教育委員会
- 高松雅文 2007「継体大王期の政治的連帯に関する考古学的研究」『ヒストリア』第 205 号、大阪歴史学会
- 内藤元太・東影 悠 2021「大和南部型埴輪の生産組織に関する復元的研究」『研究紀要』第 25 集、由良大和古代文化研究協会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015『継体大王とヤマト』
- 服部伊久男 2001「額田部地区の古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 88 集、国立歴史民俗博物館
- 服部伊久男編 1984『額田部狐塚古墳周濠部発掘調査概要報告』、大和郡山市教育委員会
- 服部伊久男編 1991『松山古墳Ⅰ－第 1・2 次発掘調査概要報告書－』、大和郡山市教育委員会

## 第6章 四条1号墳における埴輪の生産体制

### 1 はじめに

橿原市四条町一帯には古墳時代中後半頃から築造が盛んになると考えられる四条古墳群が展開しているが、この群集墳からは「大和南部型埴輪」（東影 2019、内藤 2020）が出土する。これまでにこの四条古墳群出土埴輪のうち7号墳、2号墳、8号墳、9号墳のものに関してはその生産体制の検討をおこなったことがあり（内藤・東影 2021）、IV群の円筒埴輪製作集団が形象埴輪の製作も担っていたのに対し、大和南部型埴輪の製作集団は主に円筒埴輪の製作を担うという器種間分業が行われていた可能性を指摘した。これは大和南部型埴輪の製作集団が当初円筒埴輪の製作に特化した集団として編成されていた可能性を示しており、その集団の成り立ちを考える上で興味深い。

同論文では大和南部型埴輪の製作集団がその後徐々に形象埴輪の製作も担当するようになっていく可能性についても記述したが、普通円筒埴輪及び朝顔形埴輪そして形象埴輪がそれぞれ一つの古墳の中でどのような生産体制の中で製作されたのかといった個別の事例の検討を積み重ねることで、ある埴輪製作集団の活動の変遷過程を明らかにしていくことができると考える。このような背景のもと、本章では近年その発掘調査報告書が刊行された四条1号墳出土の埴輪（北山編 2024）を分析の対象とし、その埴輪生産体制の一端を明らかにしたい。

### 2 四条1号墳出土埴輪について

四条1号墳は墳丘長 37.5 m の造り出し付方墳である。当古墳は木製の埴輪が多量に出土したことで著名であるが、通常の埴輪としては円筒埴輪、朝顔形埴輪、男子・武人・力士・巫女などの人物埴輪、鹿・猪・犬・鶏・馬などの動物形埴輪、家・蓋・盾・鞆などの器財埴輪が出土しており、四条古墳群の中で埴輪の出土量が最も豊富である。円筒埴輪及び朝顔形埴輪は 1888（以下、番号は発掘調査報告書に掲載の遺物番号を記載する。）を除く多くの個体に「外面一次調整のタテハケと内面調整のタテハケの傾きが相反する」・「突帯間隔に比して底部高が高い」・「外面2次調整として回転性の高いヨコハケが用いられる」・「波形の線刻が見られる」・「口縁部が肥厚する」・「朝顔形埴輪に関しては肩部が著しく長い」といった特徴が認められる（内藤 2020）。外面の回転性の高い2次調整ヨコハケがないものが多数存在するが、概ね底部高が高く、内外面の1次調整が相反する様相から見て、これらの埴輪は大和南部型埴輪の製作集団によって製作されたと考えられる。その段数構成は3条突帯4段構成以上で、1858 など4条突帯5段構成の個体もあり、現状では大和盆地南部で判明している確実な大和南部型円筒埴輪の中では大型の埴輪群であるといえる。

なお、四条古墳群の中での四条1号墳出土埴輪の編年的位置づけに関しては、筆者の編年研

究にもとづけば（内藤 2020）、底部調整の押圧、線的な波形線刻、肥厚する口縁が認められることから、四条 2・8 号墳に後続し、出土埴輪の多くに底部の押圧が認められる 9 号墳よりやや古く位置付けられる可能性が高い。また四条古墳群では時期を経るにつれ、出土円筒埴輪の主体がⅣ群埴輪から大和南部型埴輪に変化していく傾向が認められるが（内藤・東影 2021）、古式の大和南部型埴輪を有する四条 2 号墳では出土埴輪の 6 割が大和南部型であるのに対し、四条 1 号墳では出土円筒埴輪の 9 割以上が大和南部型埴輪となっており埴輪出土傾向からみても四条 1 号墳は四条 2 号墳に後続する古墳である可能性が高い。

### 3 四条 1 号墳における埴輪の生産体制の検討

大和南部型埴輪の製作集団は当初円筒埴輪の製作に特化していたが、新沢千塚 166 号墳と新沢千塚 175 号墳及びイノヲク 12 号墳などを例に挙げて論じたように（内藤・東影 2021）、時期を経るにつれ形象埴輪の製作を徐々に行うようになり、Ⅳ群の埴輪製作集団との分業状態を解消し、特に小規模な古墳においては大和南部型埴輪製作集団単独で一古墳の埴輪全体の製作をおこなっていくように生産体制を変化させた可能性が指摘できる。

四条古墳群においても 2 号墳や 8 号墳において一部の埴輪を製作した大和南部型の埴輪製作集団が、1 号墳においては大型の円筒埴輪や朝顔形埴輪の製作を主体的に担っていたことが明らかである。四条 1 号墳出土の蓋形埴輪の台部を見ると、内外面の 1 次調整の向きが相反しており、2 次調整として回転性の高いヨコハケが用いられている様相が観察でき、大和南部型埴輪製作集団が蓋形埴輪の生産に関わっていることが認められる。四条 1 号墳への埴輪供給に際して大和南部型埴輪の製作集団は四条 2 号墳や 8 号墳の埴輪を製作していた頃に比して生産体制の規模を拡大させていた可能性が高い。以下出土埴輪のハケメの検討からその生産体制の詳細な検討を行いたい。

### 4 四条 1 号墳出土埴輪のハケメの観察

一古墳あるいは異なる古墳間での埴輪の生産体制の検討を行う際、埴輪のハケメの観察は極めて重要である。今回『四条遺跡Ⅳ』（北山編 2024）で報告された四条 1 号墳出土埴輪及び図 231 にまとめられている四条 1 号墳周辺から出土した古墳には直接伴わない埴輪の全ハケメを比較検討したところ<sup>(1)</sup>、異なる個体間で一致するハケメは 40 種類存在することが明らかになった（図 24～図 38、表 4）。この検討の結果異なる器種間で同じハケメが用いられているものを複数確認することができた。円筒埴輪と朝顔形埴輪はどちらも形態的に大和南部型埴輪の特徴を有しているが、ハケメ 3・4・5・7・9・10・12・14・16・17・19・20・22・23・25 と多くのハケメが両者で一致しており、間違いなくその多くが同じ工房内で製作されている。また、上述したように蓋形埴輪には大和南部型埴輪の特徴が認められるが、ハケメ 4・5・9・10・11・15・17・18・20・21・22・23・24・26・27・34 では大和南部型の円筒埴輪や朝顔



表4 四条1号墳出土埴輪のハケメ一致状況

ハケメ番号	円筒	朝顔	蓋	鞍	盾	家	犬	鶏	力士	人物	武人	巫女	馬	猪	不明動物
1	○														
2	○														
3	○	○													
4	○	○	○												
5	○	○	○	○											
6	○														
7	○	○													
8	○														
9	○	○	○												
10	○	○	○	○											
11	○		○												
12	○	○													
13	○														
14	○	○													
15	○		○												
16	○	○													
17	○	○	○												
18	○		○												
19	○	○													
20	○	○	○												
21	○		○												
22	○	○	○												
23	○	○	○												
24	○		○												
25	○	○													
26	○		○												
27		○	○						○						
28								○		○		○			
29										○		○			
30				○				○		○	○				○
31											○				
32													○		
33			○												
34	○		○												
35			○	○	○										
36			○												
37			○												
38			○												
39			○			○?									
40				○	○										

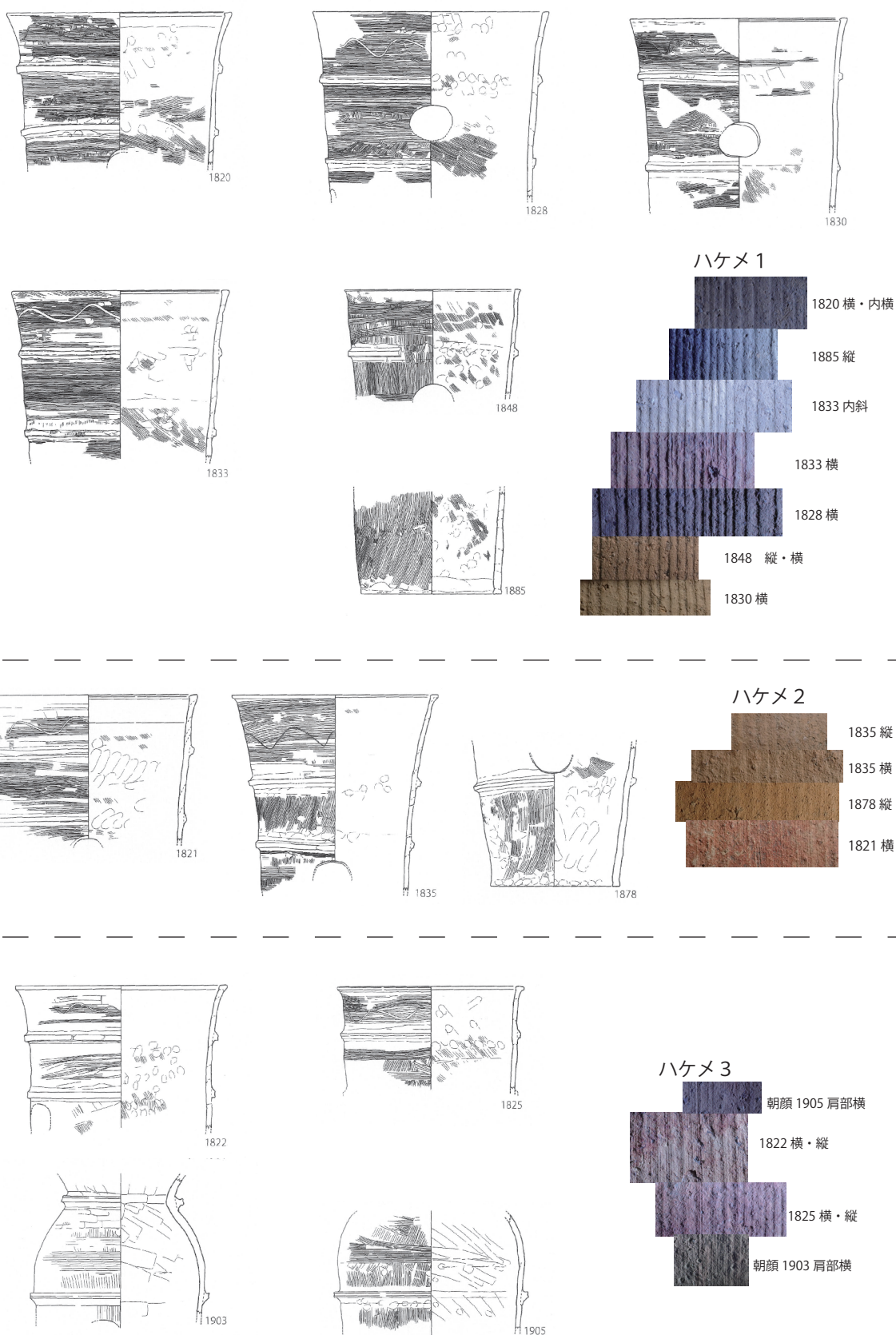


図 24 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 1 (図面は  $S = 1/10$ 、ハケメは等倍)

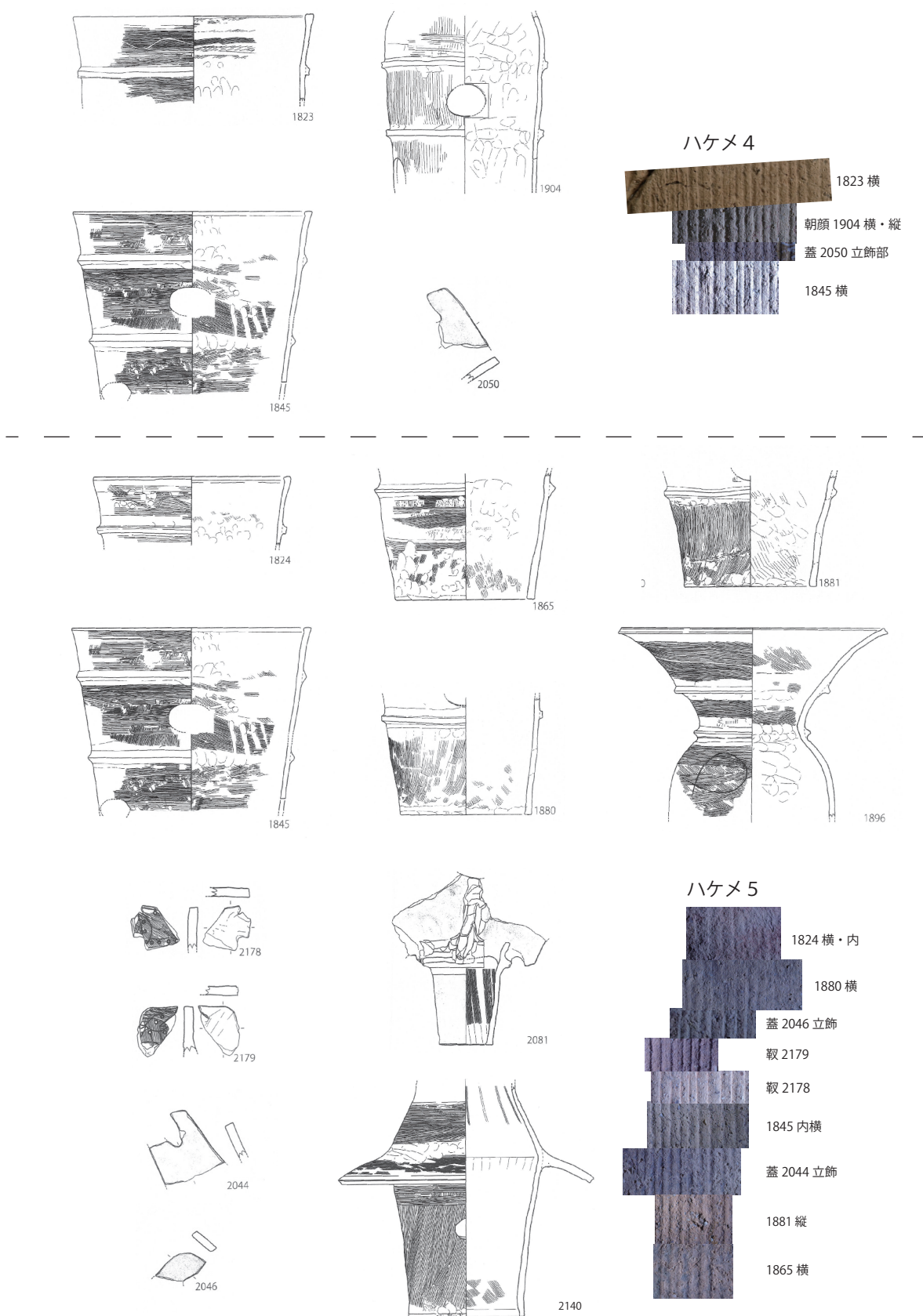


図 25 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 2 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

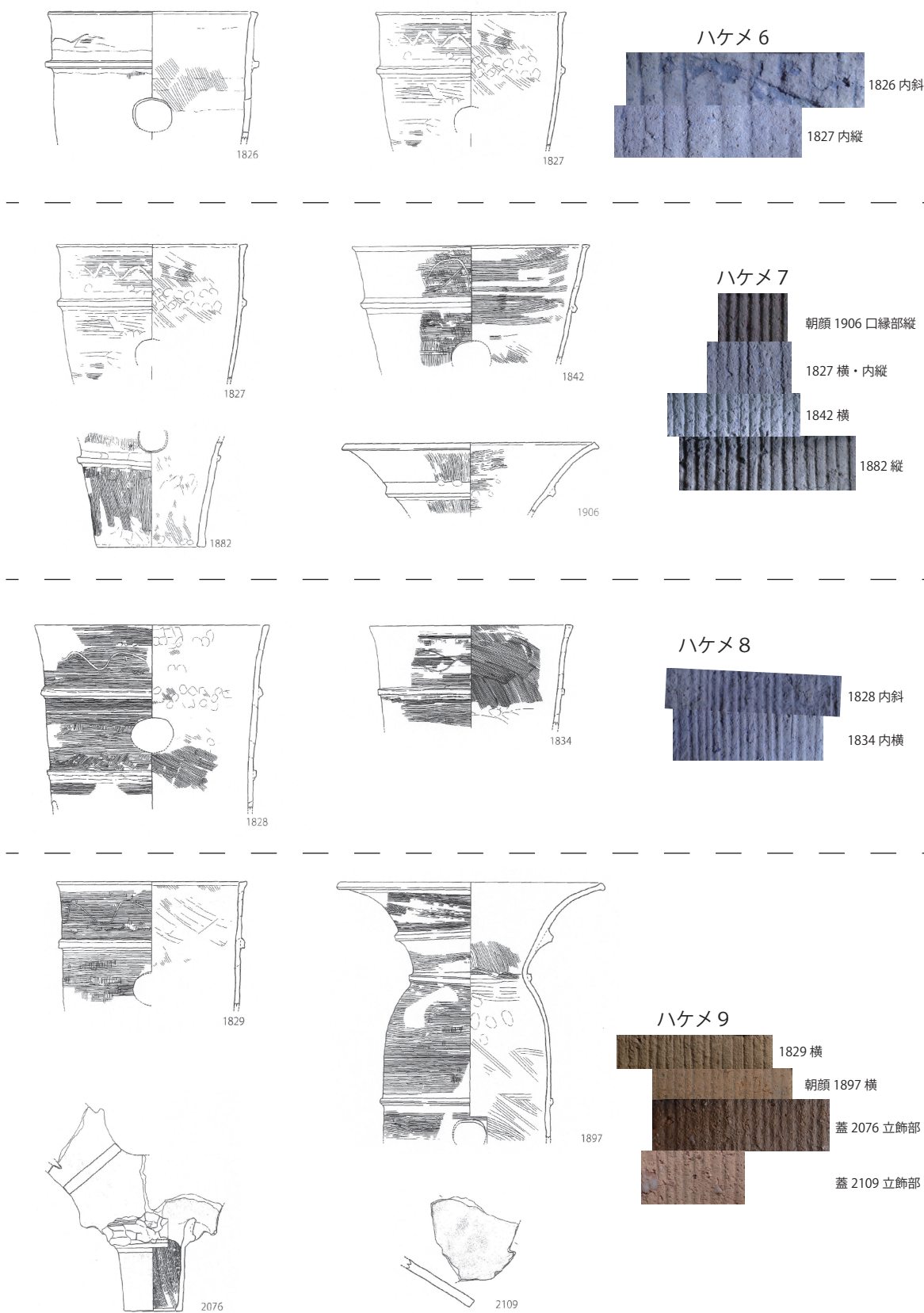


図 26 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 3 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)



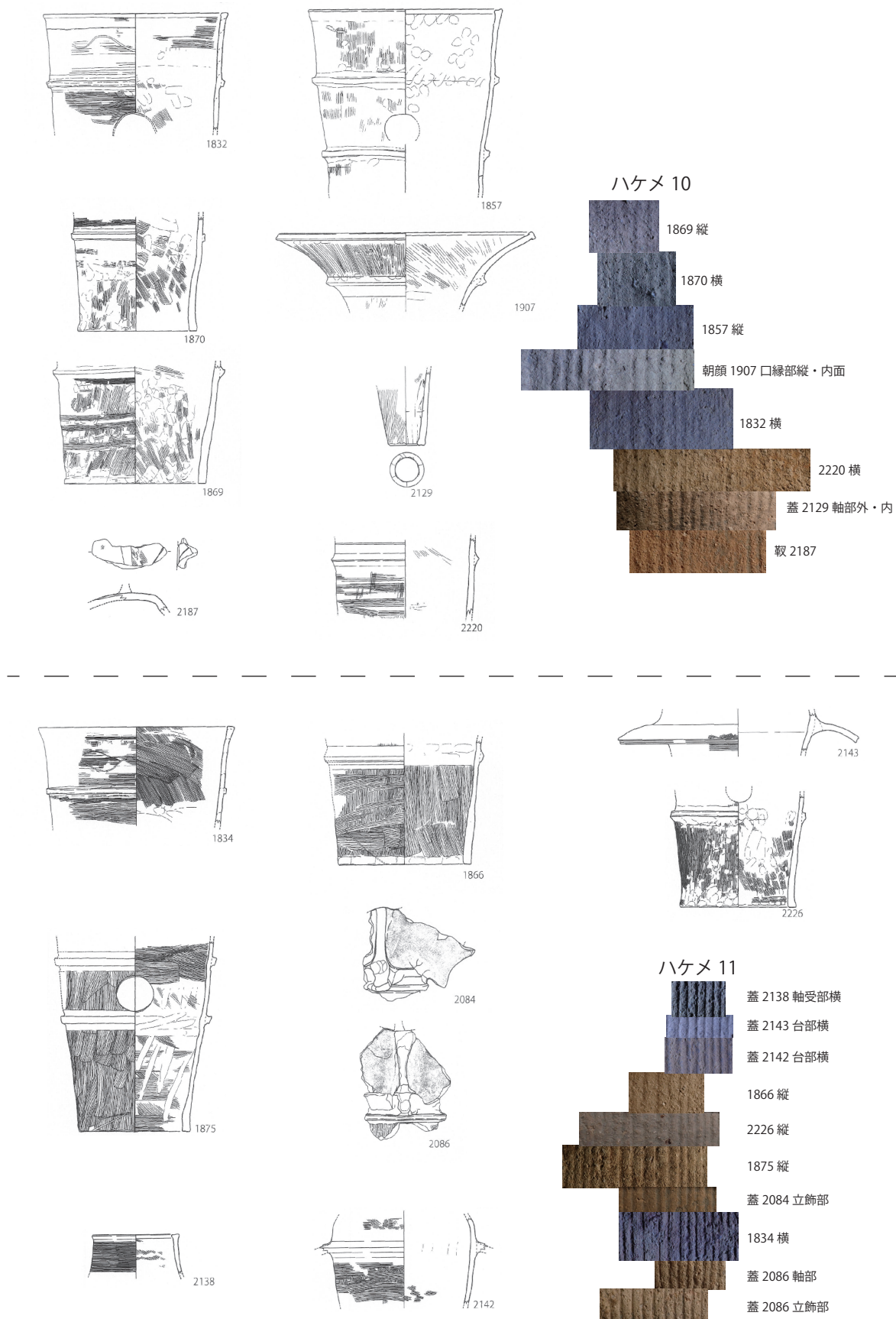


図 27 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 4 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

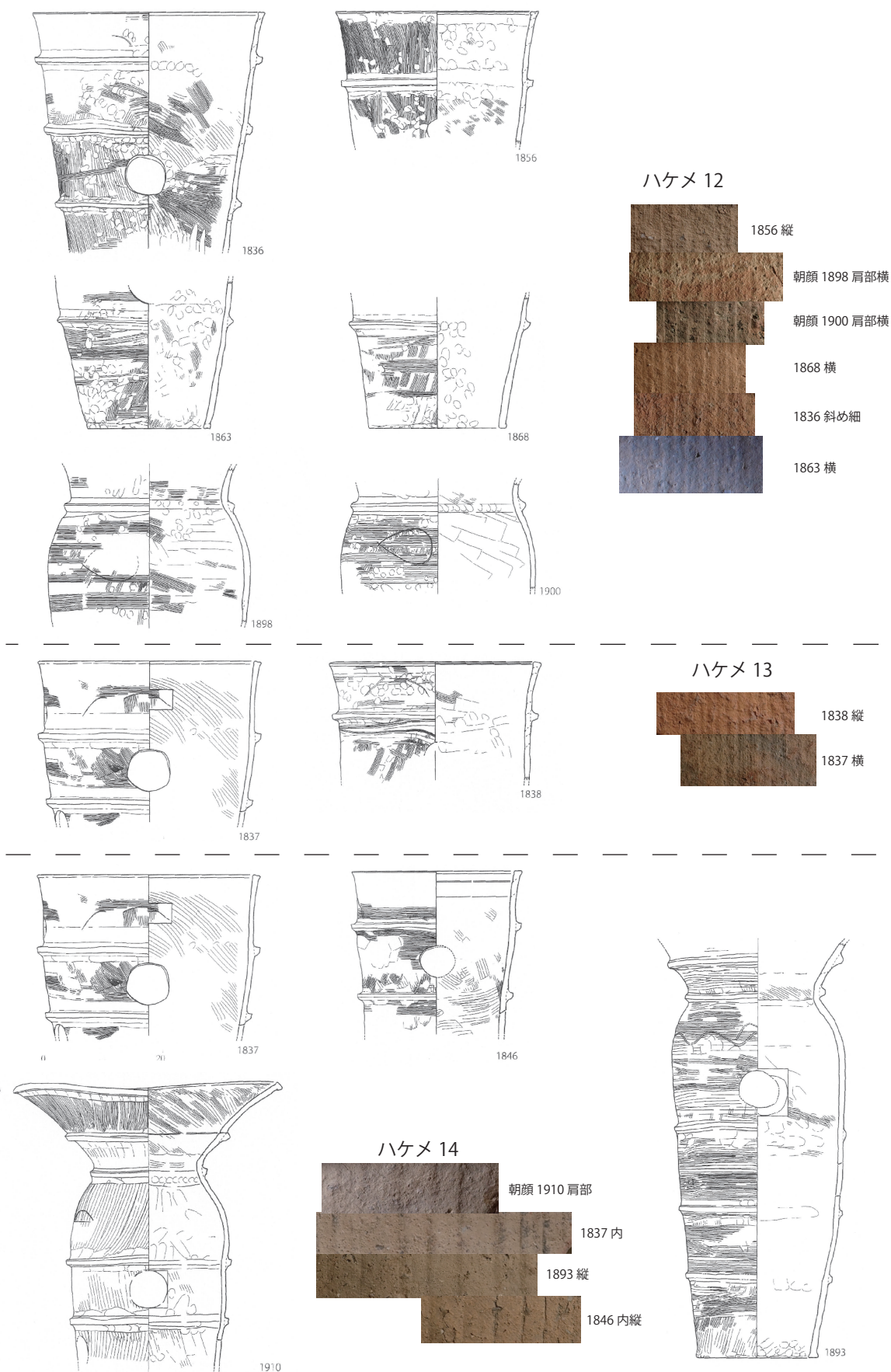


図 28 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 5 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

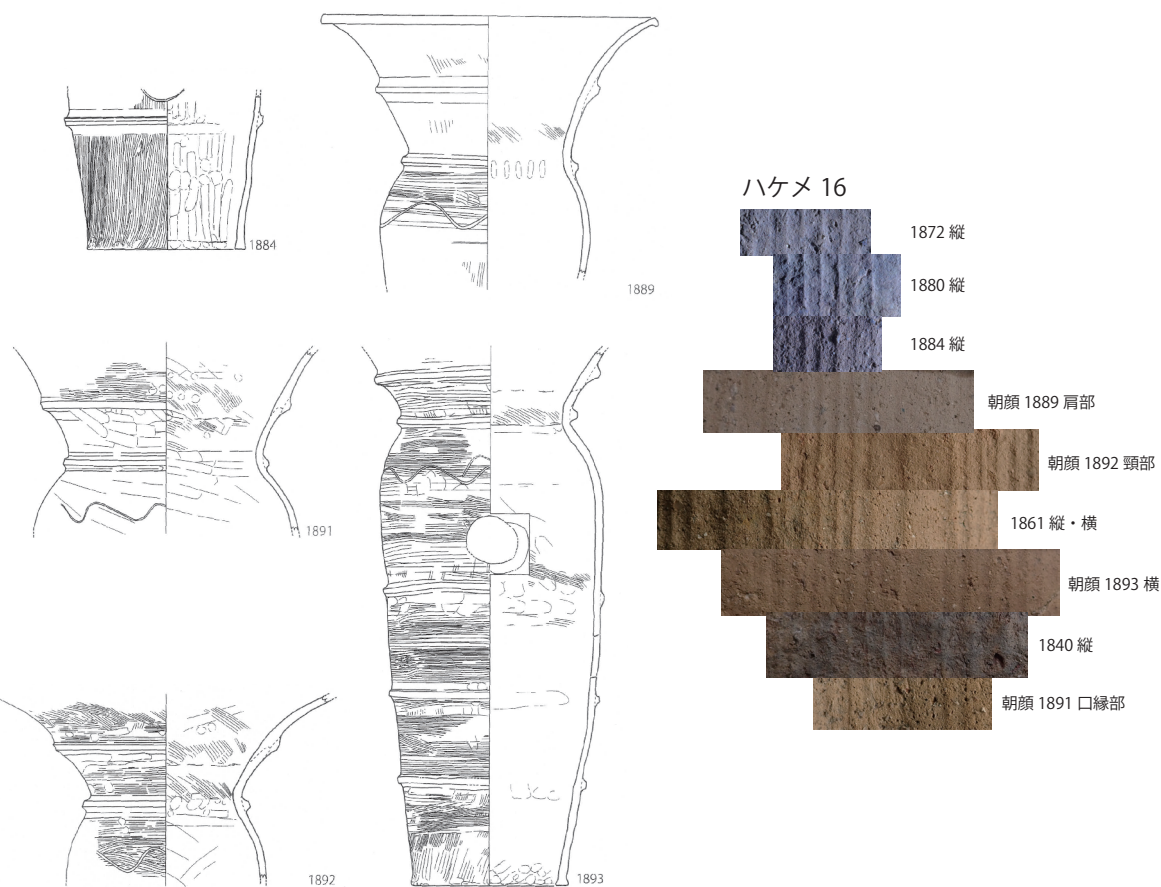
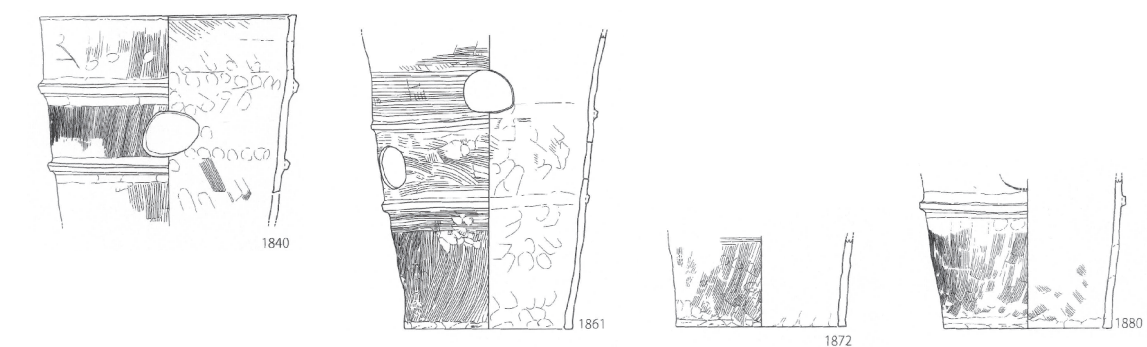
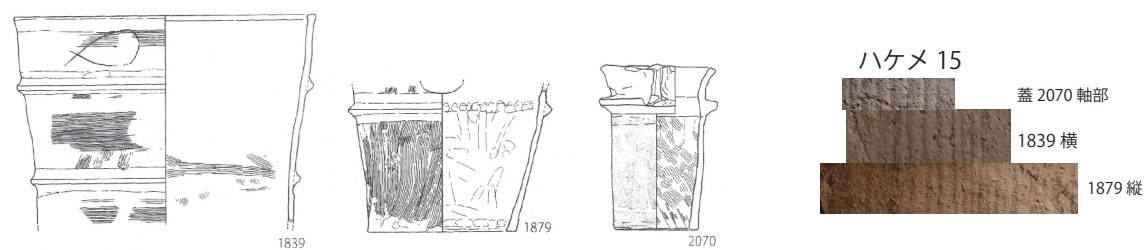
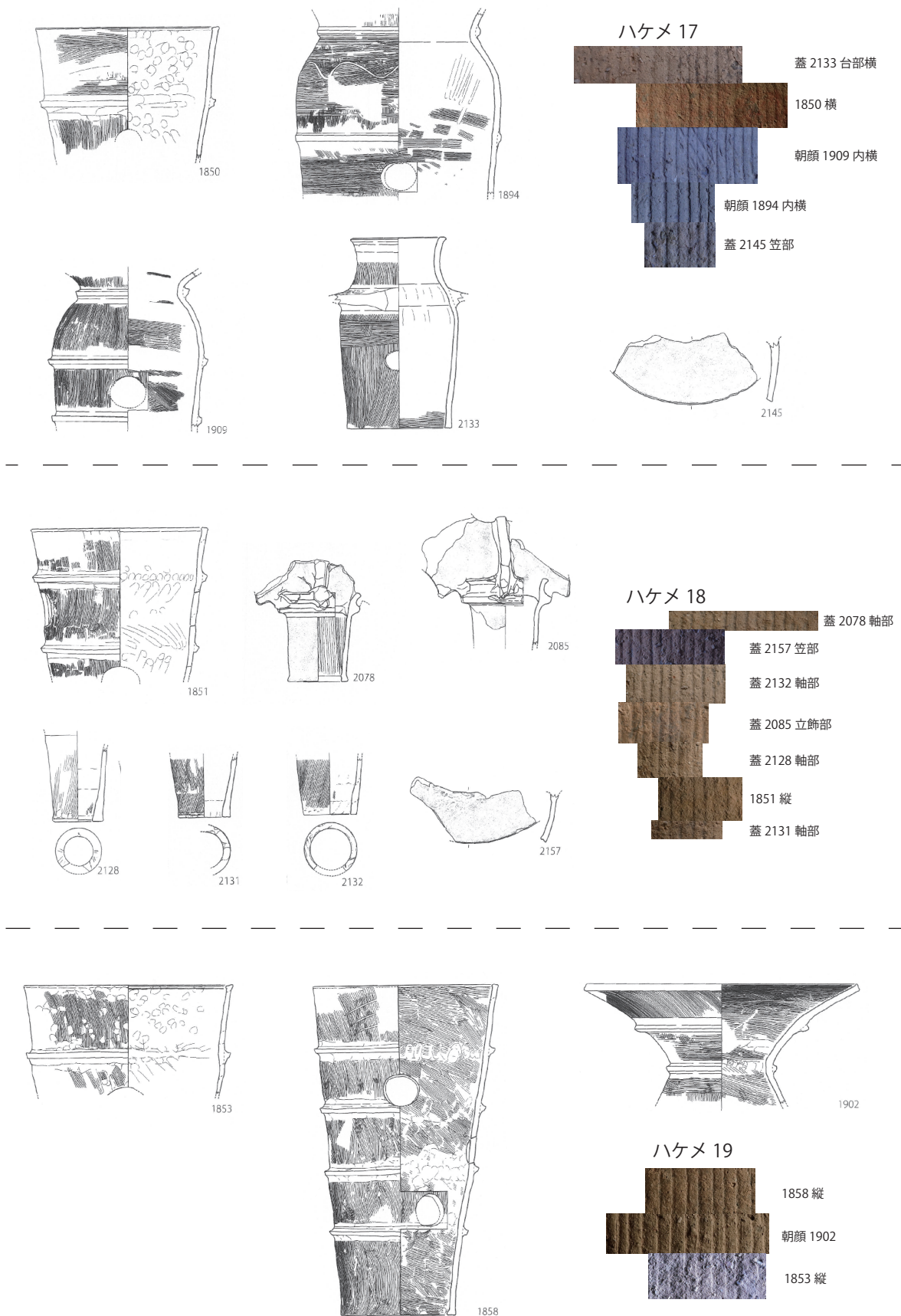


図 29 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 6 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)







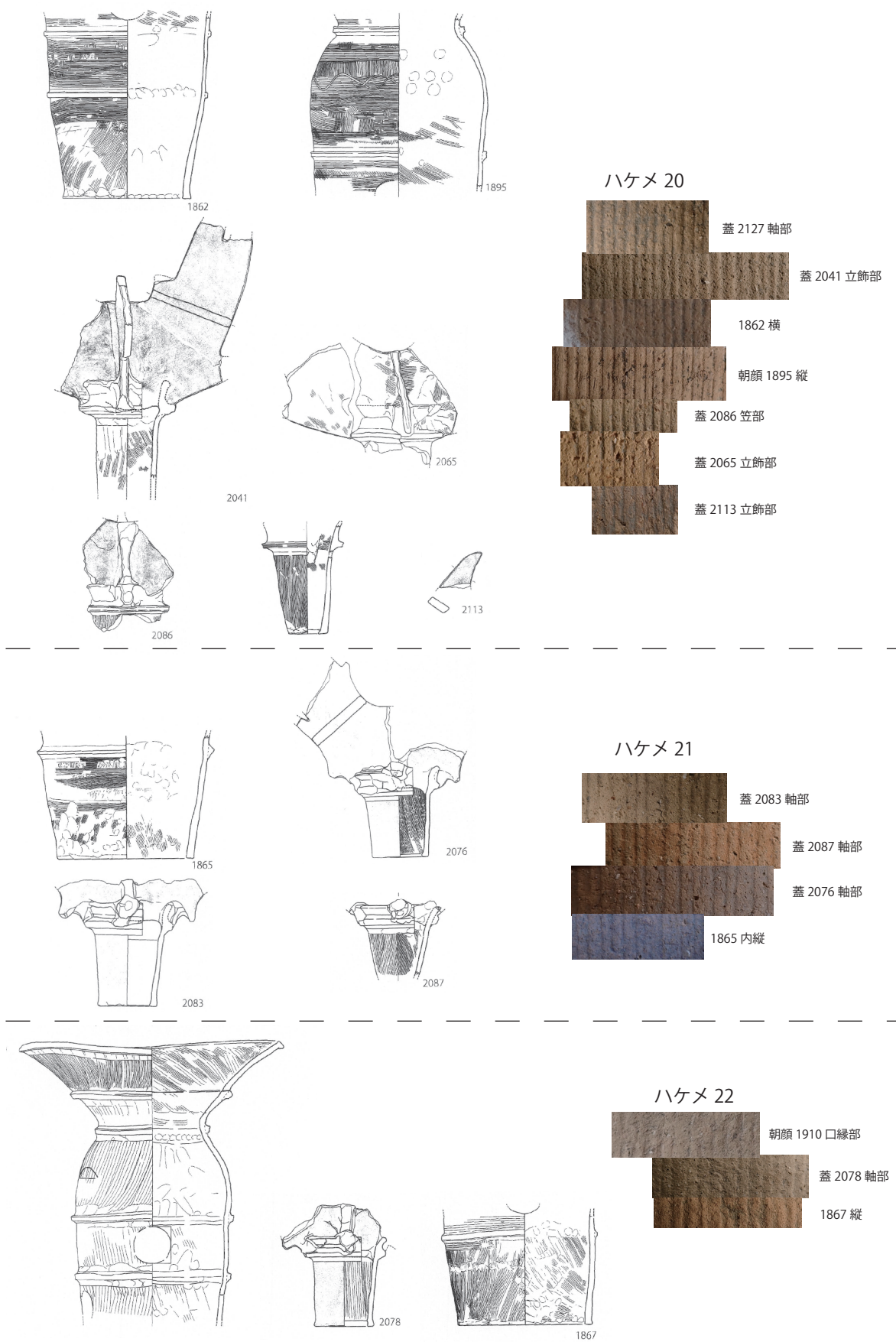


図 31 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 8 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

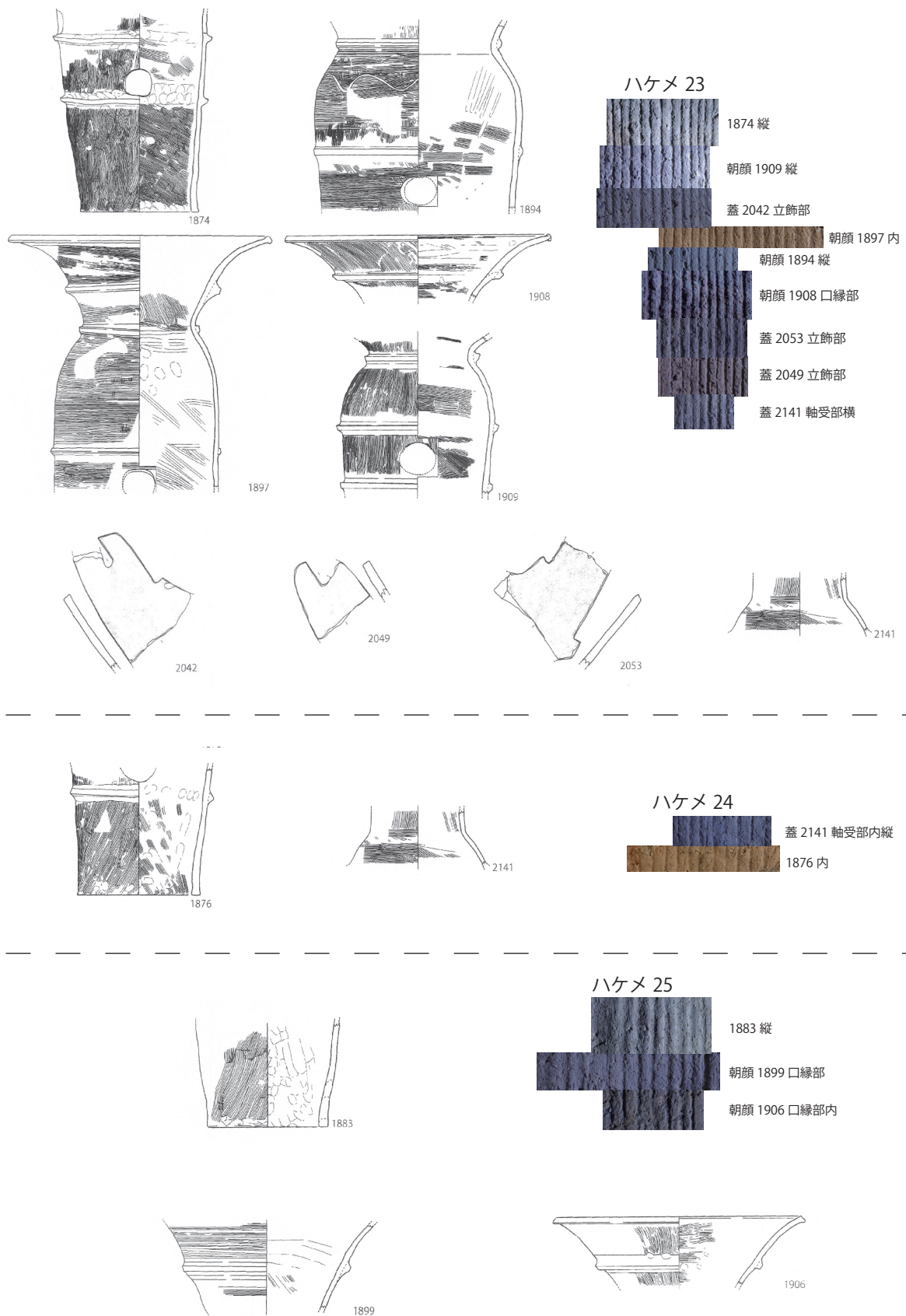


図 32 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 9 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

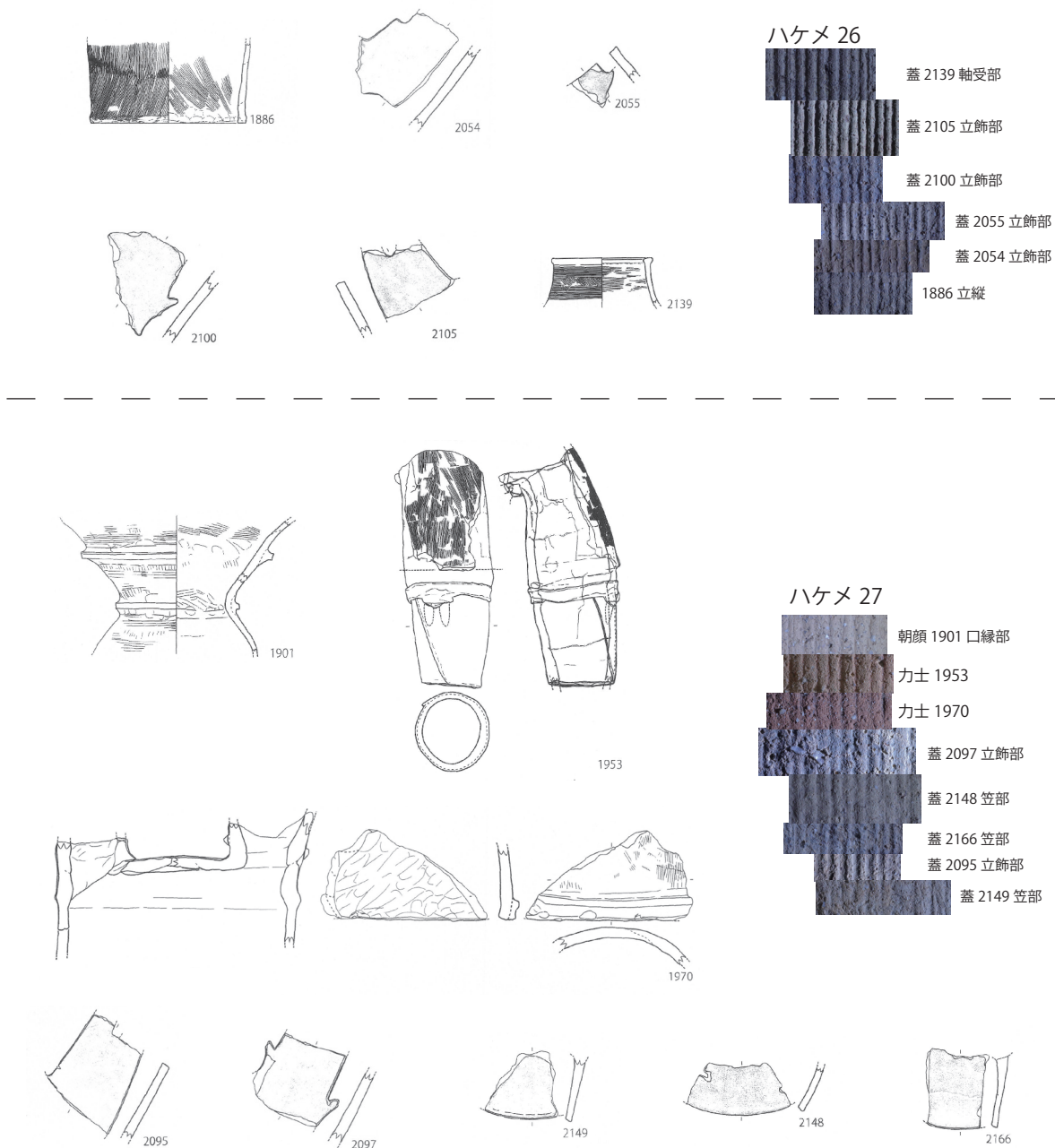


図 33 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 10 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

形埴輪と蓋形埴輪のハケメの一致が確認できる。

このように四条 1 号墳では、蓋形埴輪の多くが大和南部型埴輪の製作工人によって製作されていたことがハケメの状況からも確認できる。今回、蓋形埴輪で見出したように、台部が円筒形である形象埴輪については外面一次調整のタテハケと内面調整のタテハケの傾きの相反を確認することで大和南部型の形象埴輪として同定できる可能性が高いが<sup>(2)</sup>、四条 1 号墳では蓋形埴輪以外に円筒部が良好に残存している形象埴輪が少なく形態的な特徴からの検討が難しい。そこでハケメの比較検討を行うと、ハケメ 5・10・35 で大和南部型の円筒埴輪や朝顔形埴輪と靱形埴輪や盾形埴輪とのハケメの一致が認められた。そのほかハケメ 27 においては朝顔形埴輪と蓋形埴輪及び力士形埴輪のハケメの一致を確認した。



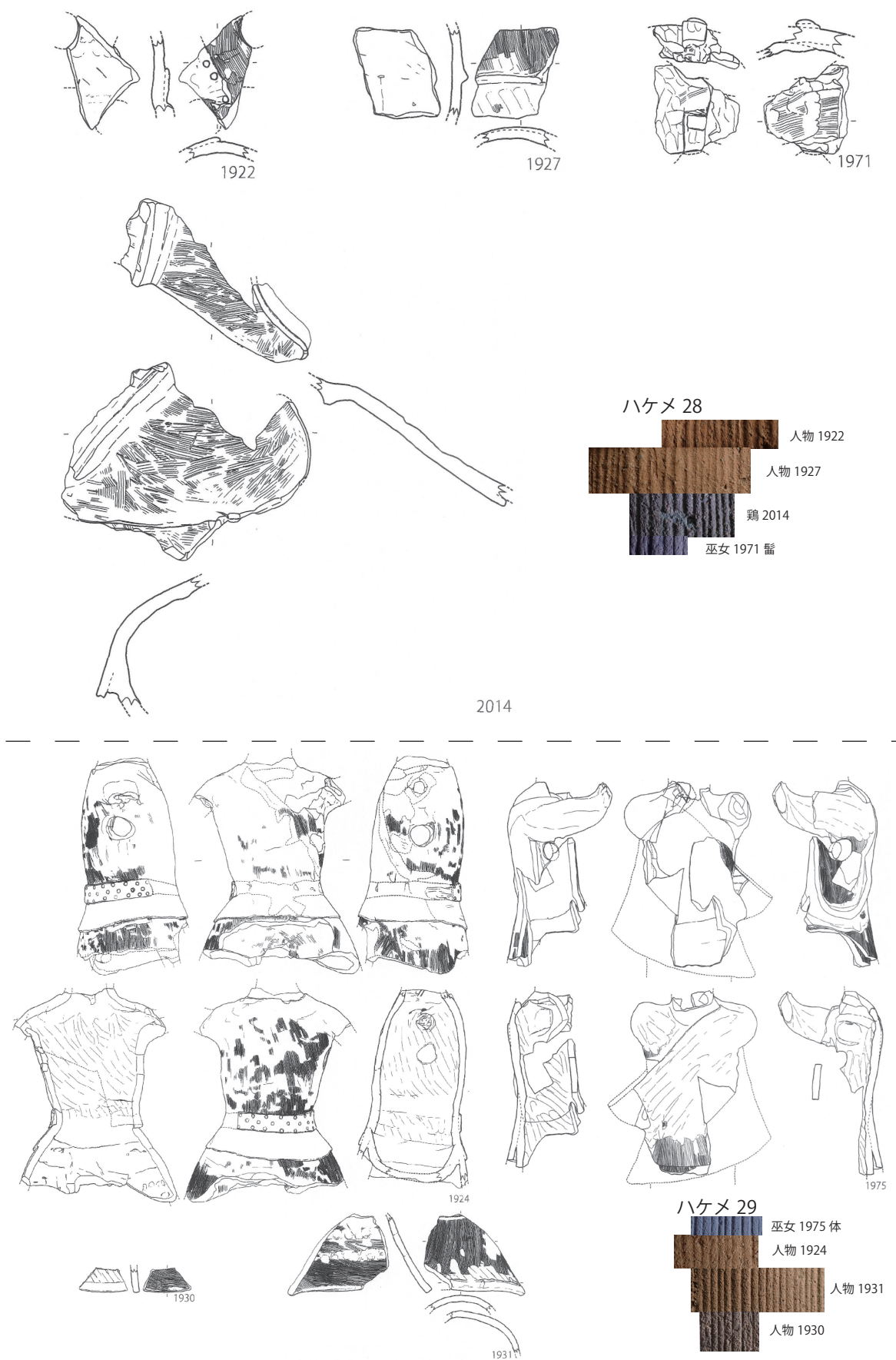


図 34 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 11 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)



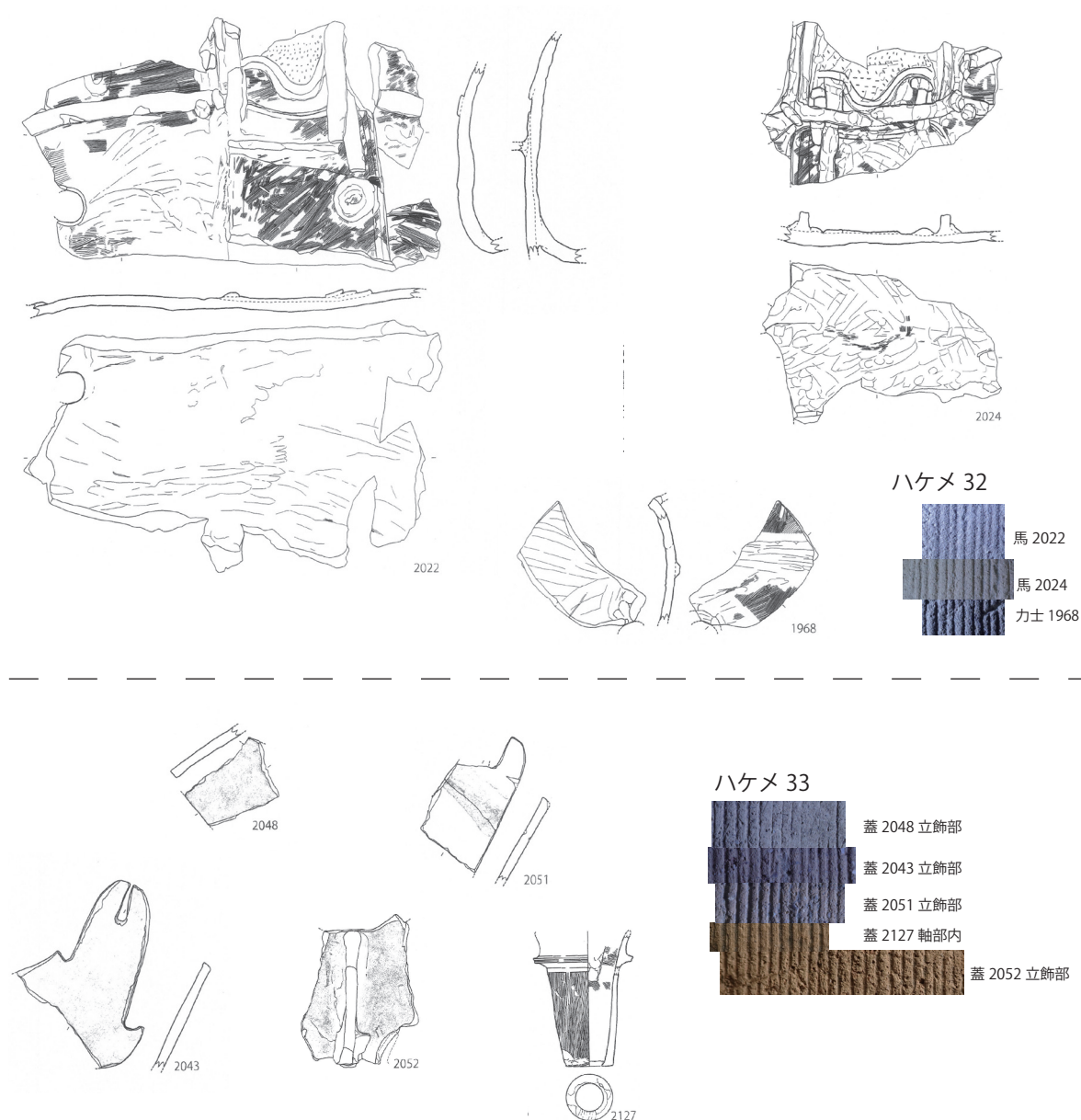


図 36 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 13 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

この結果から四条 1 号墳においては蓋形埴輪に加えて鞍形埴輪、盾形埴輪など器財埴輪の製作に大和南部型埴輪の製作工人が携わっていた可能性が高いことを指摘できる。またハケメ 39 では蓋形埴輪と家形埴輪あるいは何らかの器財埴輪の可能性のある 2227 とのハケメの一致が確認できる。蓋形埴輪が大和南部型の形象埴輪である可能性が高いことを踏まえると 2227 も大和南部型埴輪製作工人がその製作に関与していると考えられる。力士形埴輪は朝顔形埴輪 1901 と蓋形埴輪のハケメが一致するが、これは人物埴輪の製作にも一部大和南部型埴輪の製作工人が関わっていた可能性を示す。ただしハケメ 28・29・30 が示すように四条 1 号墳では人物埴輪と動物埴輪には共通のハケメが多く認められる一方、円筒埴輪や朝顔形埴輪及び蓋形埴輪のハケメと力士以外の人物埴輪及び動物埴輪のハケメはほぼまったく一致しない<sup>(3)</sup>。

今回分析した資料において円筒埴輪や朝顔形埴輪そして蓋形埴輪と人物埴輪や動物埴輪との



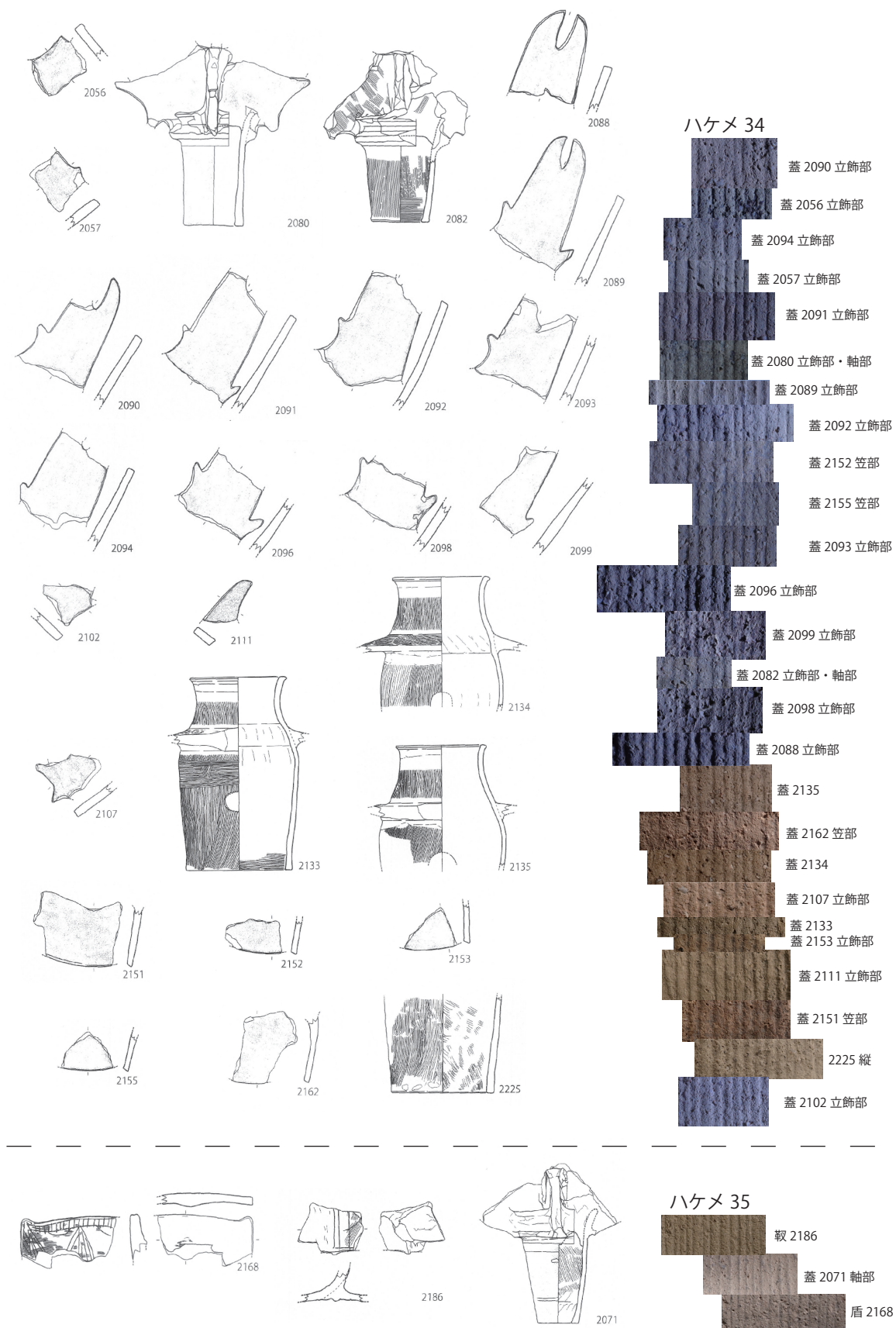


図 37 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 14 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

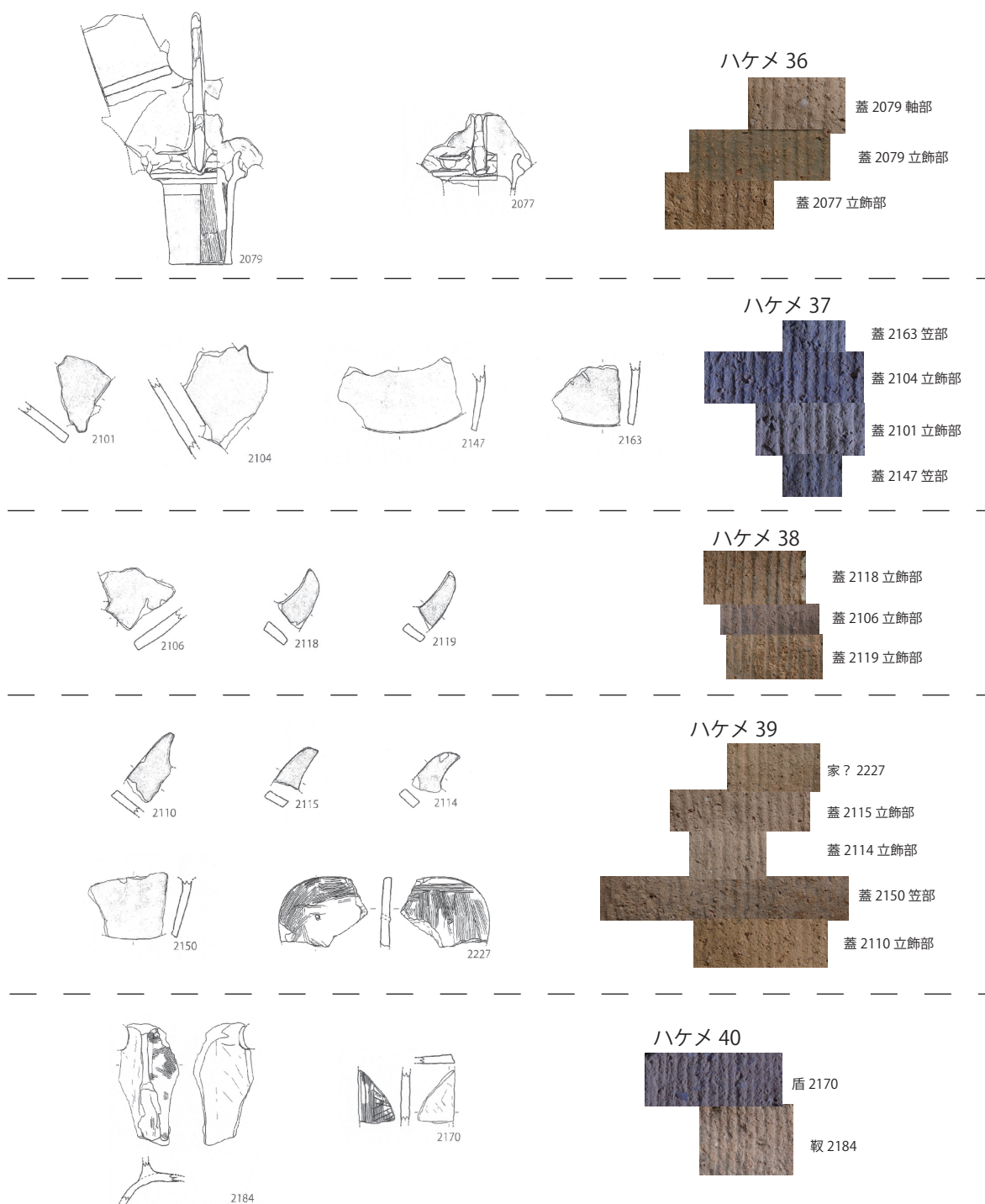


図 38 四条 1 号墳出土埴輪のハケメ一致状況 15 (図面は S= 1/10、ハケメは等倍)

間に偶然あまり一致するハケメがみられなかった可能性もあるが、器財埴輪の多くが円筒埴輪や朝顔形埴輪と共通のハケメを有する一方、その他の形象埴輪においては力士形埴輪と朝顔形埴輪一点及び蓋形埴輪のハケメが一致するのみである状況からみると、人物埴輪や動物埴輪を製作した集団あるいは個人と大和南部型の埴輪である円筒埴輪・朝顔形埴輪の製作集団が近い関係で埴輪生産に従事していたと積極的には評価し難い。加えて多くの人物埴輪と動物埴輪は同一の工房で製作された蓋然性が高いことを踏まえると、四条 1 号墳では大和南部型埴輪製

作集団が円筒埴輪や朝顔形埴輪及び蓋・靱・盾などの器財埴輪及び家形埴輪の可能性が高い埴輪の生産に主に従事した一方、人物埴輪や動物埴輪は特定の工人個人か前者の埴輪製作集団とは別の集団によってある程度専門的に製作された可能性があるとの推測もできる。

## 5 まとめ

大和南部型埴輪製作工人が製作した形象埴輪に関しては高橋克壽（高橋 2012）や木村理（木村 2023）などによってその形態的特徴の整理がおこなわれているが、ハケメの検討を踏まえて大和南部型埴輪製作工人による形象埴輪製作への関与を実証した例はほとんどない。その点で今回四条 1 号墳においては蓋・靱・盾などの器財埴輪及び家形埴輪と思われる埴輪の製作に大和南部型の埴輪製作工人が関わっているほか、力士埴輪の製作にも関与している可能性があることを明らかにしたことは一定の意義がある。また、全体的な傾向として人物埴輪や動物埴輪は特定の工人個人か大和南部型埴輪製作集団とは別の集団によってある程度専門的に製作された可能性があることも本論では指摘した。ただしハケメを重視した検討においてハケメの一致を根拠にした立論には一定の説得力がある一方で、ハケメが一致しないという結果に立脚した論はやや説得力に欠ける。

四条 1 号墳では四条 2 号墳や 8 号墳のように異系統の円筒埴輪が多数共存していない。そのため四条 1 号墳ではハケメ 28・29・30・31・32 などから人物埴輪や動物埴輪の生産体制に一定のまとまりが見いだせるが、このハケメが残るハケ工具を用いた工人または工人集団が大和南部型の埴輪製作集団に属していたのか、それとも大和南部型の埴輪製作集団とは全く別の集団に属していたのか円筒埴輪や朝顔形埴輪を系統判断の根拠として用いながら論じることが極めて難しい。したがって本論は大和南部型埴輪の製作集団の形象埴輪製作への関与を考える上での極めて初歩的な検討行うに留まった。今後、今回のような検討の事例を他の古墳でも積み重ねるとともに、大和南部型の形象埴輪の形態的な特徴の検討をより深化させることで、大和南部型埴輪製作集団の活動の実態をより明らかにしていきたい。

## 註

- （1）埴輪のハケメを個体間で比較する分析方法は犬木努によって確立された埴輪の同工品分析（犬木 1995）の検討項目の一つである。異なる個体間でハケメを同定することにより、少なくとも同じ工房内で製作された埴輪を同定することが可能である。なお 2220、2225、2226、2227 は四条 1 号墳に伴う埴輪か不明と報告されているが四条 1 号墳出土埴輪とハケメが一致するため、本来は四条 1 号墳に伴っていた埴輪であると認識し分析している。
- （2）これは他の古墳でも同様である。紀伊の岩橋千塚古墳群では大和南部系の円筒埴輪や朝顔形埴輪と同一の工房で製作されたようにみえる形象埴輪が多く存在する。
- （3）円筒埴輪と朝顔形埴輪とハケメが一致する力士を除く人物埴輪や動物埴輪は今回確認できなかったが、ハケメ 30 においては人物埴輪と動物埴輪に靱と報告される 2190 のハケメが含まれる。靱 2190 が大和南部型埴輪と評価できるなら、人物埴輪や動物埴輪の製作における大和南部型埴輪製作工人の関与の可能性も高まる



が、靱の基部のみによる系統の評価は難しい。そのほかハケメ 32 では力士形埴輪と本書第 3 章で東影が大和南部型と推定した馬形埴輪のハケメが一致している。この馬形埴輪が大和南部型の埴輪と評価できるなら、大和南部型の朝顔形埴輪や蓋形埴輪がハケメ 27 において力士形埴輪のハケメと一致することが整合的に理解できる。本論ではあくまで確実に大和南部型埴輪と考えられる円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪とハケメが一致する資料を中心に論を展開しているが、形態的な検討から大和南部型の形象埴輪を特定し、形象埴輪の中での製作集団の違いや系統差を見出す作業を今後行わなければならない。

#### 参考文献

- 犬木 努 1995「下総型埴輪基礎考―埴輪同工品論序説―」『埴輪研究会誌』第 1 号、埴輪研究会
- 鐘方正樹 2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』、第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 河内一浩 1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』、巽三郎先生古稀記念論集刊行会
- 北山峰生編 2024『四条遺跡Ⅳ』、奈良県立橿原考古学研究所
- 木村 理 2023「大和南部型埴輪の分類と様式―藤原宮下層資料の報告から―」『文化財論叢Ⅴ』、奈良文化財研究所
- 高橋克壽 2012「埴輪」『講座日本の考古学』8、青木書店
- 辻川哲朗 2010「市尾墓山古墳出土埴輪の再検討」『考古学は何を語れるか』、同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 内藤元太 2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」『古代学研究』第 225 号、古代学研究会
- 内藤元太・東影 悠 2021「大和南部型埴輪の生産組織に関する復元的研究」『研究紀要』第 25 集、由良大和古代文化研究協会
- 坂 靖 2007「大和の円筒埴輪」『古代学研究』第 178 号、古代学研究会
- 東影 悠 2019「大和南部における須恵器系埴輪の製作技術」『埴輪論叢』第 9 号、埴輪検討会

## 第7章 畿内系埴輪と須恵器系埴輪の生産

本研究では、畿内系埴輪と須恵器系埴輪の生産組織に関する検討をおこなってきた。須恵器系埴輪の生産組織の復元的研究事例を積み上げるために、特に尾張系埴輪、大和南部型埴輪のそれぞれの生産組織像を分析した。須恵器系埴輪は、須恵器製作技術という埴輪とは異なる技術的系譜を引くものの、決して両者は排他的な関係にあるのではなく、一つの古墳で共伴する傾向にある。例えば、尾張型埴輪と畿内型埴輪に同じ粘土がもちいられ、尾張型埴輪製作者が円筒埴輪、畿内型埴輪製作者が形象埴輪をそれぞれ分業して生産にあたったことが勝福寺古墳出土埴輪の胎土分析によって実証された（三辻・東影 2007）。また、古墳の墳丘形態や規模などによって示される階層秩序は、畿内型埴輪、尾張系埴輪、大和南部型埴輪のいずれにおいても円筒埴輪の段数構成と器高といった規格に緩やかに反映されている。

畿内における尾張系埴輪と大和南部型埴輪の生産の発現は、V - 1 期であったとみられる<sup>(1)</sup>。ともにその当初から畿内型埴輪製作者と分業していた状況が読み取れる（図 39）。ただし、その主体となったのは畿内型埴輪製作者であり、製作の難易度の高い形象埴輪製作には畿内型埴輪製作者があたり、須恵器系埴輪製作者はそれを補完するように円筒埴輪の製作を担った。

V - 2 期になると、四条 1 号墳や額田部狐塚古墳でみられたように、形象埴輪の製作も須恵器系埴輪製作者がおこなった事例が出現する。特に、本研究で明らかにしたように、四条 1 号墳では、蓋・鞆・盾などの器財埴輪、力士、さらには馬形埴輪の製作にも大和南部型埴輪製作者がかかわった可能性が高く、より難易度の高い複雑な形状の埴輪製作に携わった。また、額田部狐塚古墳や新沢千塚 175 号墳の埴輪は、ともに須恵器系埴輪のみで構成されるという特徴的な様相を示す。額田部狐塚古墳では、円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに蓋形埴輪が出土している。新沢千塚 175 号墳では形象埴輪は採用されなかったのかその様相は不明なものの、円筒埴輪とともに前代の V - 1 期には大和南部型埴輪製作者は手掛けなかった朝顔形埴輪を生産するようになる。

V - 3 期では、尾張系埴輪製作者集団が円筒埴輪のみならず人物埴輪や馬形埴輪の製作もおこなったことが堀切 7 号墳の様相から読み取れる。以上のように、時間の経過とともに須恵器系埴輪製作者もより難易度の高い埴輪の製作にかかわるようになり、単独で一つの古墳に埴輪を供給する体制をとる場合もあったのである。

大和南部型埴輪製作者集団の成立の背景には、四条古墳群出土埴輪の分析から、群集墳の増加に伴う円筒埴輪の大量生産という需要の増大があったことを想定した（内藤・東影 2021）。V - 1 期に出現する製作技術の簡略化された畿内型の V 群円筒埴輪についてもまさに大量生産という需要に対応すべく生み出された可能性が想定され、須恵器系埴輪のうち特に大和南部型埴輪の出現はそれに同調する動きであったと位置付けられる。V 群埴輪の出現時には、IV 群埴輪製作者集団と V 群埴輪製作者集団が共存し、形象埴輪の製作は IV 群埴輪製作者が行っていたこと（木村 2017）とも相関する現象といえる。

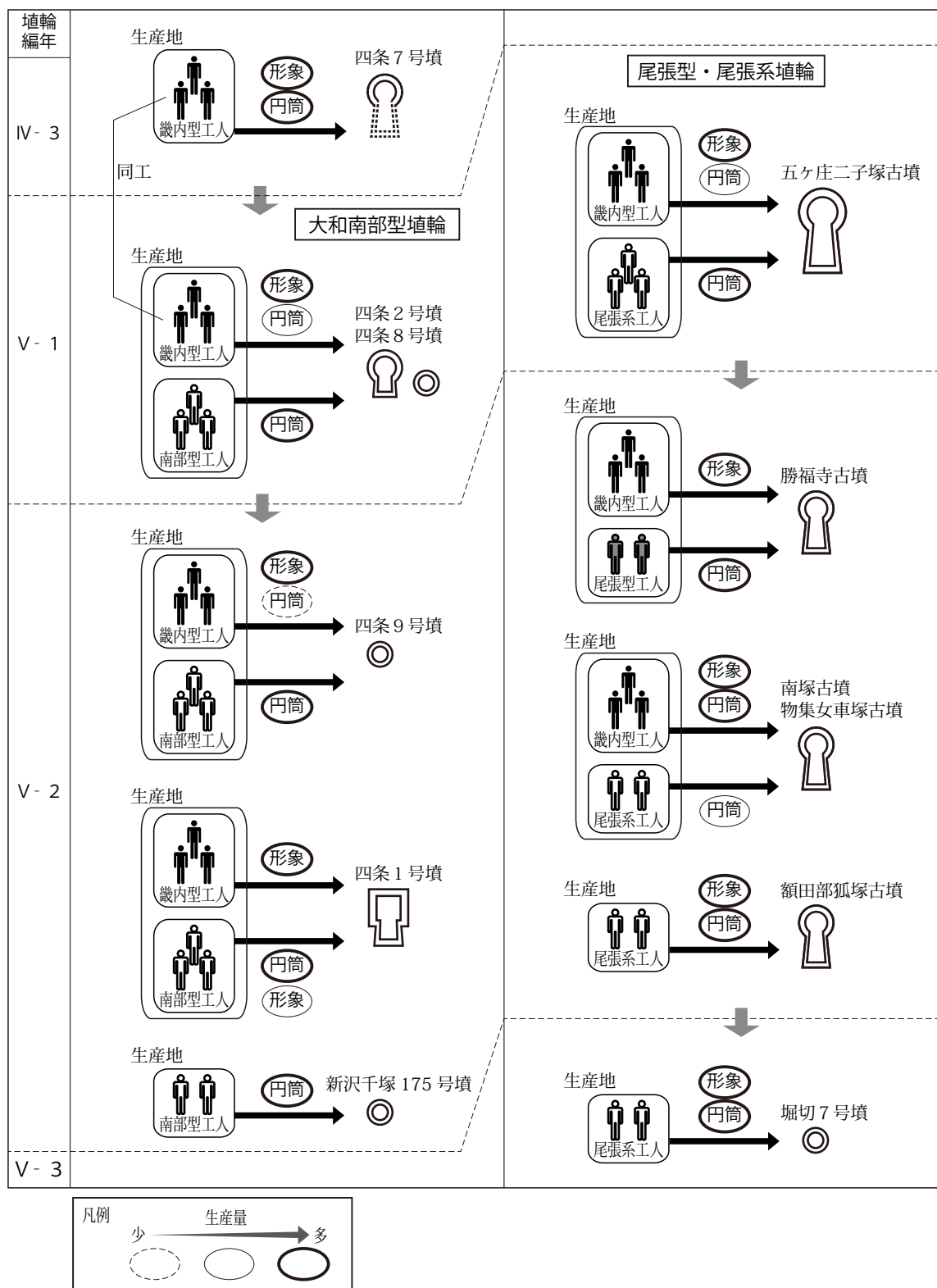


図 39 織内型埴輪と須恵器系埴輪の生産の推移

古墳時代中期末から後期にかけて畿内に分布する須恵器系埴輪は、その特殊性が重視されがちであり、その展開に政治的背景や特定氏族とのかかわりが論じられてきた。その生産組織はある一定の独立性は認められるものの、織内型埴輪とも共伴関係にあり、基本的には畿内の古墳秩序に則って生産された。大和南部型埴輪は新たに組織された、尾張系埴輪は畿内の外から



流入したという違いはあるものの、畿内型とは系統の異なるこれら須恵器系埴輪の畿内での展開は、中期末から後期における畿内型埴輪の地域性の発現とも相関する現象と位置付けられる。また、一古墳内での須恵器系埴輪と畿内型埴輪の共伴からは、異系統の製作者集団による分業の様相を読み取ることが可能である。須恵器系埴輪の製作技術的展開と生産体制の検討を通じ、技術的系譜は畿内型埴輪とは異なるものの製作する埴輪そのものは畿内型埴輪と規格・器種組成という点で共通することを示してきた。つまり、畿内に展開した須恵器系埴輪も、畿内型埴輪の様式を意図し、それを規範として生産がおこなわれたのである。畿内の須恵器系埴輪についても、畿内の埴輪生産秩序の一部としてその展開を把握していくことでその実体がより明らかにできるのである。

#### 註

(1) 大和南部型埴輪の出現については、V - 1 期を遡り、中期後半の兵家 6 号墳に求める見解もあり（鐘方 2003）、さらに検討が必要と考える。今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 鐘方正樹 2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』、第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 木村 理 2017「小古墳出土埴輪からみた古市古墳群の埴輪生産」『埴輪論叢』第 7 号、埴輪検討会
- 内藤元太・東影 悠 2021「大和南部型埴輪の生産組織に関する復元的研究」『研究紀要』25、由良大和古代文化研究協会
- 三辻利一・東影悠 2007「勝福寺古墳出土埴輪の蛍光 X 線分析と埴輪供給関係の検討」『勝福寺古墳の研究』、大阪大学文学研究科考古学研究室

## 遺跡参考文献

### 愛知県

#### 【味美二子山古墳】

浅田博造 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集 春日井市教育委員会

#### 【下原窯】

浅田博造編 2016『下原古窯跡群』春日井市遺跡発掘調査報告第12集 春日井市教育委員会

### 京都府

#### 【音乗谷古墳】

高橋克壽編 2005『奈良山発掘調査報告 I—石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査—』奈良文化財研究所

#### 【冑山1号】

高橋美久二 1993「城陽市冑山1号墳の埴輪（1）」『山城郷土資料館報』11 山城郷土資料館

久保哲正 1995「城陽市冑山1号墳の埴輪（2）」『山城郷土資料館報』13 山城郷土資料館

堤圭三郎 1999「冑山古墳群」『城陽市史』第3巻 城陽市

北山大熙編 2024『冑山1号墳発掘調査報告書』京都府教育委員会

#### 【五ヶ庄二子塚古墳】

杉本 宏ほか 1989『五ヶ庄二子塚古墳昭和63年度発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第13集 宇治市教育委員会

荒川 史編 1992『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会

東影 悠 2008「尾張系埴輪の製作技術と生産体制」『橿原考古学研究所論集』第15 八木書店

#### 【芝1号墳】

熊井亮介編 2018『芝古墳（芝1号墳）調査総括報告書～乙訓における後期首長墓の調査』京都市文化市民局

#### 【塚本古墳】

木村泰彦 1984「長岡京跡右京第106次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第1集 長岡京市埋蔵文化財センター

木村泰彦 1985「右京第173次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度 長岡京市埋蔵文化財センター

竹井治雄・吉田野々 1988「長岡京跡右京第266次発掘調査概要」『京都府遺跡概報』第27冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

木村泰彦 2010「長岡京跡右京第951次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第52集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

小田桐淳編 2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第53集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

木村泰彦編 2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第54集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

#### 【菟道門ノ前古墳】

吹田直子編 1998『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』宇治市文化財調査報告第5冊 宇治市教育委員会

#### 【中ノ段古墳】

中島陽太郎 1980「長岡京跡第7909次立合調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集 向日市教育委員会

#### 【堀切7号墳】

林 正ほか編 1989『堀切古墳群調査報告書』田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集 田辺町教育委員会

#### 【物集女車塚古墳】

秋山浩三・山中 章編 1988「物集女車塚古墳」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第23集 向日市教育委員会  
中塚 良・梅本康広 2003「物集女車塚周辺遺跡第8次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第61集 向日市埋蔵文化財センター

#### 大阪府

##### 【今城塚古墳】

鐘ヶ江一朗編 2004『発掘された埴輪群と今城塚古墳』開館1周年記念特別展図録、高槻市教育委員会・高槻市立しろあと歴史館  
今西康宏編 2013『ハニワワールドへようこそ 今城塚の大円筒埴輪展』高槻市立今城塚古代歴史館

##### 【岡ミサンザイ古墳】

笠野 毅 1977「仲哀天皇陵外溝柵設置区域の事前調査」『書陵部紀要』第28号 宮内庁書陵部  
館 邦典 1983「仲哀陵古墳発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要』大阪府教育委員会  
堀内朝保・木村成嘉・佐藤利秀 1985「恵我長野西陵墳丘崩壊部露出遺構の調査及び崩壊部応急保護工事個所の調査」『書陵部紀要』第36号 宮内庁書陵部  
天野末喜 1987「岡ミザンザイ古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅱ 藤井寺市教育委員会  
天野末喜 1988「岡ミザンザイ古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅲ 藤井寺市教育委員会  
山田幸弘 1993「はざみ山遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅷ 藤井寺市教育委員会  
佐々木理 1999「岡ミサンザイ古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』ⅩⅨ 藤井寺市教育委員会  
福尾正彦・清喜裕二 2002「恵我長野西陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第49号 宮内庁書陵部  
福尾正彦 2003「仲哀天皇 恵我長野西陵墳塋護岸工事その他整備工事個所の立会調査」『書陵部紀要』第50号 宮内庁書陵部  
有馬 伸 2007「仲哀天皇 恵我長野西陵鳥居改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第58号 宮内庁書陵部  
佐々木理編 2014『仲哀天皇陵古墳』藤井寺市教育委員会

##### 【郡川東塚古墳】

樋口 薫編 2006『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7』八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7 八尾市文化財調査研究会

##### 【白髪山古墳】

笠野 毅 1981「河内坂門原陵外堤護岸工事区域及び陵マエ排水柵設置箇所の調査」『書陵部紀要』第32号 宮内庁書陵部  
武村英治編 2001「白髪山遺跡」『古市遺跡群』XXⅡ 羽曳野市教育委員会  
吉澤則男 2001「白髪山古墳」『羽曳野市内遺跡発掘調査報告書—平成9年度—』羽曳野市教育委員会  
河内一浩 2006「白髪山古墳」『羽曳野市内遺跡発掘調査報告書—平成15年度—』羽曳野市教育委員会

##### 【城不動坂古墳】

井原 稔編 2011「高屋城・城不動坂古墳」『古市遺跡群』XXXⅡ 羽曳野市教育委員会

##### 【新池窯】

森田克之編 1993『新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会

##### 【陶邑窯】

大阪府教育委員会 1977『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29輯  
大阪府教育委員会 1978『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯  
大阪府教育委員会 1979『陶邑Ⅳ』大阪府文化財調査報告書第31輯

##### 【高屋築山古墳】



吉澤則男 2001「高屋築山古墳」『羽曳野市内遺跡発掘調査報告書—平成4年度—』羽曳野市教育委員会

【野中ボケ山古墳】

笠野 毅 1986「埴生坂本陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第37号 宮内庁書陵部

佐藤利秀・徳田誠志 1993「仁賢天皇埴生坂本陵整備工事個所の調査」『書陵部紀要』第44号 宮内庁書陵部

武村英治 1993「野々上遺跡・野中ボケ山古墳」羽曳野市内遺跡発掘調査報告書—平成3年度— 羽曳野市教育委員会

徳田誠志 1994「仁賢天皇埴生坂本陵整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部

【林13号墳】

上田 睦 2016「HY2011-7区」『藤井寺市発掘調査概報』第34号 藤井寺市教育委員会

【日置荘西町窯】

大阪府教育委員会・大阪府文化財センター 1995『日置荘遺跡—近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—』

堺市教育委員会 1991『日置荘遺跡発掘調査報告書』堺市文化財調査報告第52集

堺市教育委員会 1992『日置荘遺跡発掘調査概要報告—HKS-8—』堺市文化財調査概要報告第32冊

【昼神車塚古墳】

今西康宏編 2015「昼神車塚古墳」『たかつきの発掘史をたどる 附編・高槻市天神町所在『昼神車塚古墳』』高槻市教育委員会

【普賢寺古墳】

宇治原靖泰編 2000『普賢寺古墳』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書7 門真市教育委員会

【待兼山5号墳】

寺前直人編 2008『待兼山遺跡IV』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

【水塚古墳】

井原 稔 2000「軽里遺跡（水塚古墳）」『古市遺跡群』XXI 羽曳野市教育委員会

【三日月市3号墳】

尾谷雅彦編 1994『三日月市遺跡発掘調査報告書3』河内長野市遺跡調査会報7 河内長野市遺跡調査会

【南口古墳】

趙 哲済編 1995『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』財団法人大阪市文化財協会

【峯ヶ塚古墳】

吉澤則男編 1988『史跡峯ヶ塚古墳範囲確認調査報告書』羽曳野市教育委員会

伊藤聖浩編 1991『史跡峯ヶ塚古墳 平成2年度発掘調査概報』羽曳野市教育委員会

伊藤聖浩 1993「出土遺物」『河内古市古墳群峯ヶ塚古墳概報』吉川弘文館

下山恵子・吉澤則男編 2002『史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市教育委員会

武村英治・笠井敏光・吉澤則男 2003「峯ヶ塚古墳」『羽曳野市内遺跡発掘調査報告書—平成15年度—』羽曳野市教育委員会

井原 稔編 2008「峯ヶ塚古墳」『古市遺跡群』XXIX 羽曳野市教育委員会

井原 稔編 2010「峯ヶ塚古墳（第10次、11次）」『古市遺跡群』XXXI 羽曳野市教育委員会

吉澤則男 2016「峯ヶ塚古墳」『古市遺跡群』XXVII 羽曳野市教育委員会

【矢倉古墳】

田中和弘 1982「矢倉古墳」『はさみ山遺跡発掘調査概要』IX 大阪府教育委員会

瀬川慎美子 1988「矢倉古墳」『古市遺跡群』IX 羽曳野市教育委員会

井原 稔 2002「矢倉古墳」羽曳野市内遺跡発掘調査報告書—平成6年度— 羽曳野市教育委員会

河内一浩 2005「矢倉古墳・野々上遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成14年度—』羽曳野市教育委員会

## 奈良県

### 【市尾墓山古墳】

河上邦彦編 1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 高取町教育委員会

木場幸弘・富田真二・西村慈子 2007『国指定史跡市尾墓山古墳整備事業報告書』高取町文化財調査報告第36冊

### 【岩室池古墳】

楠元哲夫編 1985『岩室池古墳 平等坊・岩室池遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第2集 天理市教育委員会

### 【烏土塚古墳】

坂 靖 1999「勢野茶白山古墳・烏土塚古墳の円筒埴輪」『奈良県遺跡調査概報』1998年度第二冊分冊 奈良県立  
橿原考古学研究所

### 【小墓古墳】

石田大輔 2014「小墓古墳の検討」『杣之内古墳群の研究』杣之内古墳群研究会

### 【観覧寺烏ヶ峰1号墳】

内藤元太 2018「大和南部を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第8号

内藤元太 2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」『古代学研究』第225号

### 【北花内大塚古墳】

土生田純之 1980「埴口丘陵外堤護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第31号 宮内庁書陵部

土生田純之 1981「埴口丘陵外堤護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第32号 宮内庁書陵部

土生田純之 1982「埴口丘陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第34号 宮内庁書陵部

清喜裕二・加藤一郎 2006「飯豊天皇 埴口丘陵埜護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第58号  
宮内庁書陵部

宮内庁書陵部 2006『出土品展示目録 埴輪Ⅴ』

清喜裕二・加藤一郎 2007「飯豊天皇 埴口丘陵埜護岸その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第59号  
宮内庁書陵部

### 【五合瀬古墳】

坂 靖編 2007『マバカ古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第99冊 奈良県立橿原考古学研究所

### 【佐々木塚古墳】

坂 靖編 2001『下永東方遺跡』奈良県文化財調査報告書第86集 奈良県立橿原考古学研究所

見須俊介編 2015『佐々木塚古墳 第3～5次発掘調査報告書』川西町教育委員会

影山見智与編 2016『佐々木塚古墳 第6次発掘調査報告書』川西町教育委員会

### 【四条古墳群】

関川尚功編 2009『四条遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第105冊 奈良県立橿原考古学研究所

鈴木裕明編 2010『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第106冊 奈良県立橿原考古学研究所

北山峰生編 2024『四条遺跡Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第129冊 奈良県立橿原考古学研究所

### 【下田東1号墳】

小島靖彦・辰巳陽一編 2011『下田東遺跡』香芝市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 香芝市教育委員会

### 【水晶塚古墳】

坂 靖 2006「申墓古墳・水晶塚古墳の調査」『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

### 【石光山古墳群】

白石太一郎ほか 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊 奈良県立橿原考古学研究所

### 【珠城山3号墳】

丹羽恵二編 2007『国史跡珠城山古墳―第4・5次調査及び史跡整備報告書―』桜井市教育委員会

【寺口忍海古墳群】

吉村幾温・千賀 久編 1988『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第1冊 新庄町教育委員会・奈良県立  
橿原考古学研究所

【西乗鞍古墳】

石田大輔編 2016『杣之内古墳群Ⅰ 西乗鞍古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第10集 天理市教育委員会

【新沢千塚古墳群】

伊達宗泰編 1981『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊

橿原市教育委員会 1988『史跡新沢千塚古墳群保存整備報告』

奈良県教育委員会文化財保存課 1992『史跡新沢千塚古墳群整備事業報告書』

【牧野古墳】

河上邦彦編 1987『牧野古墳』広陵町教育委員会

【開古墳】

十文字健編 2019『開古墳』大和郡山市文化財調査報告書第24集 大和郡山市教育委員会

【袋塚古墳】

石田大輔 2014『天理市文化財調査年報』平成24（2012）年度 天理市教育委員会

兵庫県

【勝福寺古墳】

寺前直人・福永伸哉編 2007『勝福寺古墳の研究』大阪大学勝福寺古墳発掘調査団

挿図出典

表1 東影作成

図1 【峯ヶ塚古墳】羽曳野市教育委員会 2016、【水晶塚古墳】坂 2006、【待兼山5号墳】寺前編 2008、【新池遺跡】  
森田編 1993、【四条10号墳】鈴木編 2010、【北花内大塚古墳】清喜・加藤 2007、【物集女車塚古墳】中塚・  
梅本 2003、【岩室池古墳】楠本編 1985、【開古墳】十文字編 2019 を元に東影作成

図2 東影作成

図3 【岡ミサンザイ古墳】佐々木編 2014、【高屋築山古墳】吉澤 2001、【林13号墳】上田 2016、【寺口忍海 D27  
号墳】吉村 1988、【水晶塚古墳】坂 2006 を元に東影作成

図4～7 東影作成

図8 【岡ミサンザイ古墳】佐々木編 2014、【西乗鞍古墳】石田編 2016、【林13号墳】上田 2016、【寺口忍海 D27  
号墳】吉村 1988、【開古墳】十文字編 2019、【五合瀬古墳】坂編 2007、【佐々木塚古墳】坂編 2001、【野中  
ボケ山古墳】徳田 1994、【峯ヶ塚古墳】羽曳野市教育委員会 2016、【小墓古墳】石田 2014、【市尾墓山古墳】  
木場ほか 2007、【白髪山古墳】河内 2006、【水塚古墳】井原 2000、【普賢寺古墳】宇治原編 2000、【矢倉古墳】  
河内 2005、【塚本古墳】木村 1985、【音乗谷古墳】高橋編 2005、【下田東1号墳】小嶋・辰巳編 2011、【南  
口古墳】趙編 1995、【郡川東塚古墳】樋口編 2006、【中ノ段古墳】中畠 1980、【芝1号墳】熊井編 2018、【冑  
山1号墳】高橋 1993 を元に東影作成

図9 【今城塚古墳】今西編 2013、【高屋築山古墳】吉澤 2011、【昼神車塚古墳】今西編 2015、【水晶塚古墳】坂  
2006、【三田市3号墳】尾谷編 1994、【城不動坂古墳】井原 2011、【岩室池古墳】楠本編 1985、【物集女車塚古墳】  
中塚・梅本 2003、【菟道門ノ前古墳】吹田編 1998、【袋塚古墳】石田 2014、【四条6号墳】関川編 2009、【珠  
城山3号墳】丹羽編 2007、【日置荘西町窯】大阪府教育委員会・大阪府文化財センター 1995、【烏土塚古墳】

坂 1999、【牧野古墳】河上編 1987 を元に東影作成

図 10 【五ヶ庄二子塚古墳】東影 2008、【勝福寺古墳】寺前・福永編 2007、【堀切 7 号墳】林ほか編 1989、【四条 8・9 号墳】鈴木編 2010、【新沢千塚 166・175 号墳】伊達編 1981、【観覚寺鳥ヶ峰 1 号墳】内藤 2020、【石光山 20 号墳】白石ほか 1976 を元に東影作成

表 2・3 東影作成

図 11 【勝福寺古墳】寺前・福永編 2007、【堀切 7 号墳】林ほか編 1989、【新沢千塚 175 号墳】伊達編 1981 を元に東影作成

図 12 【TK103 号窯】大阪府教育委員会 1978、【TG225 号窯】大阪府教育委員会 1977、【MT203 号窯】大阪府教育委員会 1979、【TK36 号窯】大阪府教育委員会 1979、【TK87 号窯】大阪府教育委員会 1978 を元に東影作成

図 13 東影作成

図 14 写真：東影撮影

図 15 【四条 1 号墳】北山編 2024、【味美二子山古墳】浅田 2004 を元に東影作成、写真：東影撮影

図 16～21 東影作成

図 22・23 写真：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015 を一部改変

表 4 内藤作成

図 24～38 内藤作成

図 39 東影・内藤作成





---

古墳時代後期における畿内系埴輪と  
須恵器系埴輪の生産組織に関する比較研究

令和2年度～令和6年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）  
『古墳時代後期における畿内系埴輪と須恵器系埴輪の生産組織に関する比較研究』  
（課題番号：20K01103）研究成果報告書

2025年3月発行

研究代表者 東 影 悠（奈良県立橿原考古学研究所）  
発行 奈良県立橿原考古学研究所  
奈良県橿原市畝傍町1番地  
印刷 橋本印刷株式会社  
奈良県葛城市竹内365番地1

---

